

ある日、骨壺を受け取った

under_

前口上

僕の記憶に残っている最初の葬儀は、母方の祖母のものであった。

当時まだ小学校低学年で、学校から帰ってくるなり黒い服に着替えさせられると、高速道路を使って二時間近くかかる母親の実家へ連れて行かれた。普段はよく喋る父親も母親も、その時だけは黙って夜道を眺むように見つめていた。二人の緊張が伝わってきて、僕は後部座席でずっと身を縮めていた。

ところが、母親の実家は、車内の重々しい雰囲気とはずいぶん異なっていた。二十畳を超える仏間に礼服の上着を脱いだ大勢の大人たちが、寿司桶とビール瓶を中心にいくつかの輪を作り、その間を、割烹着姿の女性たちがグラスやつまみを載せたお盆を持ってせわしなく動き回っていた。お祭りのように騒々しく、時折大きな笑い声も聞こえた。

その光景に最初は戸惑い、それから怒りを覚えた。祖母が亡くなったというのに、なんて不謹慎だろう。正直に言えば、祖母の思い出は少ない。お盆と正月に顔を会わせる程度だ。

そんな記憶の薄い祖母でも亡くなるのは悲しいことだ。学校の先生だってテレビだってそう言っている。死とは別れであり、涙を流して送り出すものだ、と。しかし、仏間の大人たちは酔ってバカ笑いに興じてるようにしか見えなかった。彼らは祖母のことをどうとも思っていないに違いない。悲しんでいるのは僕たち家族だけだ……。

そう思った矢先、運転中ずつと硬い表情を浮かべていた父

親は、「どうもどうも」と言いながら近くの輪組に加わった。そして隣の男性からビールを注いでもらい、笑みを浮かべた。そして母親も、ちょうど横を通りかかった同い年くらいの女性に向かって、「久しぶり、元気だった!」と言うと、嬉しそうに肩を叩き合った。

誰も祖母の死を悲しんでいない! 彼らが集う理由は、祖母の死を嘆くのではなく、テレビドラマ等であるように、遺産目当てに違いない。

母親はにこにこ笑いながら女性と会話を続けていたが、やがて僕の不信感に満ちた視線に気付いたのか、振り返って「どうしたの?」と訊ねてきた。僕は率直に疑問をぶつけた。「お母さんって、お祖母さんの遺産目当てでここに来たの?」すると母親は隣の女性と目を合わせ、二人揃ってカラカラと高い声で笑い出した。

「何言ってるの、この子は。お祖母さんの遺産なんて、コーヒー一杯分も残っちゃいないわよ!」

「じゃあどうして、みんな笑ってるの? お祖母さんが死んで悲しくないの!」

母親はしゃがんで視線を合わせると、僕の頭をゆつくりと撫で始めた。

「田舎の葬式ってこんな感じよ。これはお祖母ちゃんが繫いだ縁なの!」

翌日、少し早い昼食の後、告別式が始まった。一晩中仏間で飲み食いしていた大人たちを含め、広い仏間には入りきらないほどの人々が集まり、いつまで経っても焼香が終わらな

かった。ずっと正座していた僕もすっかり足が痺れてしまった。すると隣に座っていた父親が声をかけてきた。

「退屈か？」

昨日、あれだけお酒を飲んでいた父親も今は真顔だった。

父親は数珠を握りしめたまま俯いている母親を一目見てから、今ちようど焼香をしている男女に指を向けた。

「あれ、誰かわかるか？」

僕は首を振った。

「あの二人は山口さん、お母さんの従兄弟だ。その後ろで待っているのは谷さんでこれもお母さんの従兄弟だ。その後ろが堀さん、お母さんの再従姉妹だよ……」父親は次々と参列者の名前を口にしていく。「……で次が六原さん。確か、お祖母さんの兄弟の親戚だったはず」

「本当に、いっぱいいるんだね」

「凄いだろ、お母さんの家系は。みんなお前と血が繋がっているんだ」

僕は仏間を見渡した。両親と僕の三人、それが家族の全てだと思っていた。でも血の繋がりはこんなにも広がっている。僕は素直に驚いた。

「じゃあ、あの人は？」

一人の女性を指差すと、父親は首をひねった。

「……誰だったっけ？」

「笹原さん」母親の声が出た。「この家のお隣さんですよ」

母親によると、この場には、親類のみならず、近所の人々、老人会、祖母が亡くなる直前まで趣味で続けていた水彩画サ

ークルの仲間たち、そして、地元の議員までも参列しているという。

「みんな、お祖母ちゃんに最後のお別れを言いに来たのよ」

そう言っただけ母親は再び数珠を強く握りしめた。

出棺の時、気付けば、むせび泣く声さがざ波のように仏間に広がっていた。母親も父親の背中で泣いていた。昨日のバカ騒ぎの面影はまったく見られなかった。昨日母親が言っていたことが、少しだけ理解できたような気がした。僕も目と鼻をこすった。

葬式から一週間後、父親の運転で再び二時間以上かけて祖母の家に向かった。今回も仏間に入りきれないほどの人が集まり、初七日の法要が執り行われた。僧侶が読経している間、僕は、祖母の遺影と、それから両手で抱えないと持てないほど大きな骨壺を見つめていた。

次に記憶に残っている葬儀は、両親のものだった。

中学生最後の年、高校受験も間近に迫った冬のこと。僕が独り家で試験勉強をしている間に、二人は車で買い物に出かけ事故に巻き込まれた。原因は対向車のスリップ。その日はとても寒く、当時僕が住んでいた地域では珍しく雪が降っていた。

両親の事故を警察から聞かされた時、悲しむよりも先に頭の中が真っ白になってしまって、細かな経緯はほとんど覚えていない。両親の遺体を引き取った後、葬儀会社に言われるがまま、一人息子だった僕が喪主として両親を送った。葬儀

会社が手配した小さなセレモニーホールで、ほんのわずかな親戚と共に。

両親が亡くなった当時、親戚の多くと疎遠になってしまっていた。祖母が亡くなって以来、親戚づきあいが少なくなっただこともあるが、もっと大きな理由は、父親が親戚や友人の方々から借金をしていたことだ。僕はその理由を詳しく知らない。ただ、騙されただの、人が良すぎただの、お金を甘く見ていたなどと、葬式の時に集まった数少ない親戚たちが小声で話をしていたのは覚えている。本当は事故じゃなくて、事故に見せかけた自殺、なんて噂する人もいた。両親の悪口を言う彼らのことを腹立たしく思ったが、反論するだけの知識も気力もその時の僕にはなかった。連中は両親のことをなんとも思っておらず、しようがないから来てやったというのが本音だったのだろう。ここに、祖母の葬式の時に感じられたお祭りのような熱気はなく、人のいない学校の廊下のように、冷たく薄暗かった。

告別式はすぐに終わり、火葬場へ直行。祖母が暮らしていた田舎よりもずっと最新の設備のおかげで瞬く間に骨だけとなり、二つの遺影と二つの骨壺と共にセレモニーホールへ戻ってきた。そして告別式を終えたばかりだというのに、すぐさま初七日の法要が行われた。何もかもが目まぐるしく進んでいき、泣く暇もなかったというのが正直なところだ。

ただ、二人の骨壺がとても軽かったことだけははっきりと覚えている。

そして、つい最近も葬式に行ってきた。

両親を失った後、僕は親戚の一つに引き取られた。しかし、彼らは僕の存在を快く思っていないことが嫌という程伝わってきた。僕はそこで息を殺して過ごし、勉強に励んだ。おかげでいくつかの援助を得て大学に入学できた。それと同時に親戚の家を出て独り暮らしを始めた。それ以来あの親戚から連絡はないし、会ってもいない。

大学も無事卒業し、とあるIT系の会社に勤め始めた。ベンチャーのように強烈なエネルギーに満ち溢れているわけではなく、大手のように社会の屋台骨を支えているという自負があるわけでもない、普通の中堅会社だったが、着実に成長している手堅さが、僕に合っているような気がした。

ある日総務部から、会社常務の親が亡くなったという訃報メールが送られてきた。しかし、平社員の間から見ても常務なんて雲の上の存在、自分には関係がないと気にも止めていなかったが、直属の上司である、鷹野課長が慌ただしく動き始めた。彼は一般社員が集まる席にやってきた。

「おい。猪口がどこ行ったか知っているか？」

「さっきまで、隣の席にいたはずですけど……」

猪口は僕の先輩で、訃報のメールを見る直前まで、彼と話をしていた。しかし今は姿どころか鞆も見当たらなかった。

「あいつめ……逃げたな」鷹野課長は大きく舌打ちすると、僕の顔を見て言った。「しようがない。じゃあ、お前が俺と一緒に来い」

「来いって、何処にいくんですか？」

「常務の親の通夜に決まってるだろ」

「どうして？」

「何寝ぼけたこと言ってる」課長は目を吊り上げた。「常務だってお前の上司だ。上司の冠婚葬祭には万難を排して参加する、それがサラリーマンとしての勤めだろ」

葬はともかく婚に参加したら邪魔なだけでは？と思わなくもなかったが、それこそ上司命令とあれば仕方がない。家に帰って礼服として通用しそうな黒いスーツに着替え、斎場へ向かった。

そこは運動場と呼べるほど広大な敷地で、取引先の会社名が書かれた巨大な供花がその壮大さを争うかのように、壁に沿ってずらりと並んでいた。式場の入り口にはひっきりなしにタクシーやハイヤーが停まり、オーダーメイドの礼服に身を包んだ人たちがぞくぞくと訪れていた。中には弁護士や代議士のバッジをつけた人までいた。中堅とはいえさすがは会社の常務。祖母の葬式も立派だったが、今回はそれ以上だった。無論、両親の葬式とは比べるまでもない。

庭先の記帳場で香典を渡したあと、鷹野課長は故人の遺影に向かって焼香を上げるかと思いきや、そちらには脇目も振らず、喫煙所にいた常務の元へ向かった。

「常務。このたびは、ご愁傷様でした」

「ああ、鷹野くん。来てくれたのか」

「常務のご心労を思えば課のメンバー一同、居てもたつても居られずこうして馳せ参じた次第です。……何している、早くお前も頭を下げろ」

課長に言われるがまま、僕も遺影ではなく生者に向かつて頭を下げた。

「ありがたい。向こうに酒とちよつとした食事を用意してあるから、ゆっくりしていつてくれ」

そう言つて、常務は煙草の火を消すと、読経が聞こえる建物へ戻つていった。

課長は「ふーっ」と大きく息を吐いた。

「さつ、帰るぞ」

「えつ、良いんですか？ まだ焼香してないですけど」

「したきゃ、お前一人してこい。俺の用事は済んだ」

鷹野課長は本当に斎場を出ていつてしまった。どうやら故人を偲ぶのではなく、上司に顔を売るのが目的だったようだ。そして、そんな考えを持っていたのは、課長だけではないようだ。周りを見渡すと、遺影に手を合わせている人はほんの僅か、多くは外で名刺交換や商談をしていた。

急にバカバカしくなつて、僕も斎場を後にした。

骨壺はおろか、故人の顔写真すら見ることはなかった。

と、長々と語つたわけだけど、ここで僕が言いたかったことは二つ。葬儀は時代や状況に応じて様々な形があるということ。そして、どんな形であれ亡くなれば、誰かには見送られる、ということだ。

人は誰かを見送り、誰かに見送られる。それが真実だと思つていた。

あの電話が掛かってくるまでは。

一 悠

1

『雀部悠さんの携帯ですか？ 私、警察署の者ですが……』
 スマホのスピーカーからその声が聞こえた時、頭が真っ白になった。これまで盗みや殺人はもちろん麻薬などとも無縁な生活を送ってきた。それに運転免許証も持っていないので、ひき逃げ犯だと間違えられる可能性もない。警察が連絡を寄越してくる理由がまったく思い当たらなかった。

『……あのう、聞こえてますか？』

「はっ、はい。僕が雀部です」

やましいことは何も無いはずなのに、上擦った声になってしまった。

『ああ、どうも。私、蟹田と言います。そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。あなたを逮捕する、なんて話じゃありませんから』

蟹田と名乗った男は、笑いを押し殺すような声で言った。すっかり見透かされていたらしい。安堵しつつも、恥ずかしい気持ちになった。

「では、どんなご用ですか？」

『実は我々の方で、雀部さんにお返ししたいものを預かっておりまして』

「落し物ですか？」

最近、何かを紛失した記憶はなかった。

『ええ、まあ。落し物と言いますか、なんと言いますか……。少々混み合った事情がありまして、電話ではなんとも。申し訳ないですが、署の方までご足労いただけませんか？』

蟹田のはっきりしない物言いに、僕は少しだけ不審に思ったが、もし警察の依頼を断つたら後で何をされるか……。

僕は承諾するしかなかった。

次の日曜、自宅アパートの最寄駅から五駅離れたところにある、蟹田が指定した警察署へやってきた。警察署を訪れるのは、両親の事故の後、もろもろの手続きのために訪れた時以来だ。良い思い出はない。

入り口のカウンターに座っていた女性に来意を告げると、彼女は背後の事務所へ振り返って「蟹田さん」と大声で呼んだ。すると、白髪が目立つぼつちやりした男が立ち上がった。「どうも、雀部さん。私が蟹田です。折角の日曜なのにわざわざご足労いただいて、申し訳ありません」

日曜日を指定したのは僕の方だ。会社は土曜日も普通に仕事があるので、その日しか私用を片付ける余裕がない。

「こちらこそ、日曜しか予定が空けられなくてすみません」

「いえいえ、警察には日曜も年末年始も関係ありませんからどうぞこちらへ」

蟹田は恵比須様のような笑みを浮かべ、奥の会議室へ案内した。想像していたより温厚そうな人で安心した。警察といえど罵るような口調で高圧的に迫ってくる人間ばかりだと思ってしまうのは、古い刑事ドラマに影響され過ぎだろうか？

蟹田は僕を奥の席に座らせると、安物の長テールを挟んで、会議室の出入り口を背にして腰を下ろした。先ほどの受付の女性が入ってきて、僕と蟹田の前に湯呑みを置き、無言で退室した。

蟹田は緑茶をずずずと啜ってから切り出した。

「いやあ、すっかり秋めいてきましたね。朝は寒さで目が覚めるようになりましした。警察署前の大通りのイチヨウ並木もまもなく色づき始めると思いますよ。これがとても綺麗です。是非雀部さんも一度見に来てください」

「はあ」

「ときに、雀部さんほどのようなお仕事をしていたらしゃるんですか？ 刑事生活三十年の私の勘でいくと、大きな商社かなにかじゃないですか？」

「いえ、中堅のIT企業です」

「だと思いました。じゃあ、ここへ来る前にカレーを食べましたね。そんな匂いがあるから漂ってきます」

「いいえ、昼はハンバーガーでした」

「なるほど、やっぱりそうでしたか」

随分と調子のいい刑事だ。

「すみません、刑事さん。なんですかこれは？」

すると、蟹田はホッホッホッと目を細めて笑った。

「いや、ただの世間話ですよ。まずはリラックスしていただこうと」

そんなこと言われても、余計に緊張するだけだ。

それから蟹田は、自分の家族の話をしたり（カルチャー

センターに足しげく通う妻と、働きに出たばかりの娘と大学に通う息子がいるらしい）、茶菓子を勧めてきたり（最近同僚が京都に出張したらしい）と、なかなか本題に入ろうとしなかった。

たかが、落し物を返してもらっただけなのに、どうしてこんなに前置きが長いのだろう。貴重な日曜日、一刻も早く用事を終われたいのに……。

その後も蟹田はずっと微笑みを湛えたまま一方的に世間話をした後、ようやく「だいぶ打ち解けてきたことですし、そろそろ本題に入りましょう」と口にした。僕が警察署に足を踏み入れてから一時間後のことだった。

「雀部さん」蟹田は恵比寿顔を浮かべたまま言った。「あなたに受け取っていたべきアイテムがあります」

「はい、そのために来ましたから」

「その言葉を聞いて安心しました」

安心って、どういうこと？ と訊き返す前に、蟹田は続けて言った。

「しかしその前に、雀部さん。あなたは六原之雄という男をご存知ですか？」

まったく聞いたことのない名前だった。「いいえ」と言っ

て首を振った。

ところが、蟹田は強く否定した。「またまたご冗談を。そんなはずはないですよ。だって六原はあなたの親戚ですから」

「僕の親戚……？」

両親のこともあって今では縁が切れているが、祖母の葬儀

で見たように親戚自体は多い。僕の知らない親戚がまだまだたくさんいても不思議ではない。

「僕は知らないですが、いるのかもしれませんが……その方がどうされたんです？」

「実は、亡くなりました」蟹田は抑揚のない声で言った。

親戚らしいが、見たことも聞いたこともない人間の訃報を伝えられても、この前の常務の件と同じで、何の感慨も湧きようがなかった。僕はただ「そうですか」とだけ、答えた。

「この夏に、独り暮らししていたアパートでご遺体が発見されました。いわゆる孤独死ってやつです。あなたも聞いたことくらいはあるでしょ」

「はい、まあ……」

テレビやネットのニュースで時々見かける言葉だ。自宅の中で急死したが、誰にも気付いてもらえず発見が遅れる。地域の人間関係が希薄になった現代社会特有の問題らしい。隣の住人が知らない間に白骨化している……想像しただけで気分が悪くなる。

蟹田は言った。「悲しい話ですよ。まだ四十代だったというのに、日頃の不摂生がたたったんでしょ。な。雀部さんも気を付けてください。あなたもまだご結婚されてないんですよ。外食やコンビニ弁当ばかりじゃ危険ですよ」

「はあ」余計なお世話です、と心の中で思いながら、軽くうなずいた。

「それはさておき、問題は事後処理です。部屋の清掃は早々と行われました。清掃代はアパートの大家が支払ったよう

す。近隣住人の目……いや鼻が気になったんでしょ」

「鼻、ですか？」

「ええ。死体を放っておいたら、匂いが発生します。職業柄私も嗅いだことありますが、あの匂いの中じゃとても生活なんてできません。孤独死が夏に一番発見される理由は、腐敗が進んで匂いが強くなるからなんです。あとは蠅の飛ぶ音ですね。隣が騒がしいと思つて窓を見てみたら一面真っ黒……つてことも時々あります」

吐き気がこみ上げてきて、思わず口を押さえた。

「おつとすみません。怖がらせるつもりはなかったんです」言葉とは裏腹に蟹田は笑っているように見えた。「とにかく、後処理はほとんど終わっています。これだけは大家も引き取るわけにいかず、しかるべき方に渡してほしい、と言われたいまして……」

蟹田は足元から高さがA4ノートくらいの木箱を持ち上げ、テーブルに置いた。上部の蓋を開き、中から白い円柱形の物体を取り出した。その瞬間、僕の心臓は激しく跳ね上がった。それは、祖母の葬儀で初めて見て、両親の葬儀の時に僕自身が両手で抱えた、骨壺だった。

「どうぞ」

と云つて、蟹田は骨壺を僕の方へ押しやった。窓から漏れる秋の陽光を受けて、淡く光っているように見えた。

「あの、これは？」

「六原之雄さんのご遺骨です」

「それはわかってます。……どうして？」

「申し訳ありません。本当は、身内の方々に火葬いただくのが筋なんです。遺体の損傷が激しくて保存しておくことができませんでしたので、私たちの方で済ませてしまいました」

「いや、そうじゃなくて。どうして僕が？」

「受け取る方が雀部さんしかいらっしやらないからです」

蟹田の話によると、遺骨となった男の両親は既に他界しており、兄弟もいない。警察は代わりの受取先となる六原の親戚を探したが、連絡が取れたのは僕だけ、とのことらしい。

「だから雀部さん。血のつながった親戚として、これを持ち帰ってください」

「そ、そんなこと言われても……」

親戚とはいえ見知らぬ男の遺骨を受け取りたいかと訊かれれば、もちろん受け取りたくはない。こちらが逡巡していると、突然、蟹田の細目がかつと開かれた。

「まさか拒否したいなんて考えているんですか。親戚として、最後まで故人の面倒をみる義務があるんですよ。それを果たさないと言うんですか」

「だったら両親を見捨てた親戚たちのことはどうなんだ？」

と蟹田に聞いたかったが、声を荒げる警官が怖くて、何も言い返せなかった。

蟹田はさらにまくし立ててきた。「このままだと、他の骨と一緒に誰がどの骨かわからなくなるほどごちゃ混ぜにされて、無縁仏として一緒に葬られるんですよ。血の繋がったあなたの親戚が。それなのに、ちゃんと墓に入れてあげようと思わないんですか。それでも血の通った人間ですか！」

さっきまでの笑顔は消え失せ、今や蟹田の顔は夜叉のようだった。本当に事件の容疑者にされたような気になってきて、体の震えが止められなかった。

「もう一度言います。この遺骨を受け取ってください」

蟹田のドスの効いた声に、僕はとうとう草食動物の本能に従うかのように、うなずいてしまった。

すると蟹田は、ふーっと大きく息を吐くと、

「それは結構」

と言って、恵比須顔で緑茶をぐいっと飲み干した。

2

——さて、どうしたものか？

自宅アパートへ帰る間中、蟹田から半ば強引に渡されてしまった骨壺の入った木箱とわずかな遺品を両手で抱えながら、これの扱いについて悩んでいた。

両親の墓石はないが、遺骨は当時住んでいた家の近くの納骨堂に預かってもらっている。この遺骨も同じように納骨した方が良さだろうか？ しかし、納骨代も安くはない。見知らぬ男の骨のために多額のお金を払うのは気が進まない。僕自身の生活だって、毎月ギリギリでもとても裕福とは言えない。そんなお金があれば他のことに使いたい。

いっそのこと素知らぬ顔で粗大ゴミに出してしまうか、とも考えた。しかしそんな悪巧みなどお見通しとばかり、警察署を出る時に蟹田は「適当なところに捨てたら、死体遺棄と

いう犯罪になりますから、ちゃんと葬ってやりなよ」と、恵比寿顔で釘を刺してきたのだ。

人知れず亡くなった六原という男のことは不憫だと思ふ。しかし、それと僕が遺骨を受け取ることは別問題だ。

そうこうするうちに、自宅の1Kアパートに帰ってきた。

「ただいま」と言いながら玄関の扉を開ける。すぐさま、「にゃー」と甘えた鳴き声が返ってきた。目の前に茶色いトラ縞の猫が両前足を揃えてちょこんと座っている。僕の飼い猫……いや、唯一の家族だ。名前はトラ。二才。

トラはつぶらな瞳を僕の顔へ向けて、もう一度「にゃーっ」と鳴いた。心も体も溶けてしまいそんなほどの可愛さだ！

「ご飯だね。ちよつと待ってて、すぐに用意するから」

靴を脱いで上がり、居間に向かって歩き始めると、トラも尻尾をびんと立ててすぐ後ろをついてきた。可愛い！可愛いすぎて、涙すら出てきそうだし！

僕はベッドの上に靴とジャケット、そして一人用のローテーブルの上に骨壺の入った木箱を置いた。それから台所へ行き、トラの食事皿にキャットフードを入れた。

「トラ、用意できたよ。……あれ？」

玄関からずつと後をついてきていたはずのトラの姿がなかった。

「おーい、トラ。ご飯いらなの？」

居間の方から物音が聞こえたので覗いてみると、トラがローテーブルの上に乗って、前足で木箱に触れようとしていた。「おっと、危ない」

慌ててトラの前から木箱を取り上げた。

「これは触っちゃだめ」

興味津々な目つきで木箱を見つめるトラは「それで遊ばせろ！」と、抗議するかのように「にゃーっ」と鳴いた。しかし、いくら愛猫の頼みとはいえ承諾しかねる。万が一ひっくり返されてもしたら、床一面に骨と灰が散乱……。想像したくない事態だ。

僕はクローゼットを開けた。この中にしまっておけばいたずらされることもないだろう。ちょうどスペースがあったので、そこに骨壺が入った木箱と、一緒に押し付けられてしまった六原氏の遺品を押し込んだ。

クローゼットを閉めると、ため息が出た。

——さて、どうしたものか。

3

「雀部、そりゃ、完全に貧乏くじを引かされたな」

アジフライの尻尾をくわえながらそう言ったのは、会社の同僚、猪口さんだった。僕が入社した時から色々と相談のつてくれる頼れる先輩だ。

警察署から骨壺を受け取った翌日、僕と猪口先輩は会社近くの定食屋で、少し遅めの昼食を取っていた。そこで昨日の出来事を先輩に話すと、先の言葉が返ってきた。

「そもそも、親戚が見つからなかったという、警察の話も怪しいな。その遺骨野郎と雀部はいったいどういう関係なん

だ？ 叔父か？ 従兄弟か？」

僕は首を振った。「わからないです。警察も、親戚としか言っただけです。でもそれくらい近かったら、名前くらいは聞いたことあると思うんです」

「じゃあ、もっと血縁の近い親戚連中がみんな受け取りを拒否した結果、遠縁の雀部にお鉢が回ってきたんだろう」

「えっ、そうなんですか？」

蟹田が親戚は僕しかいないと言ったのは嘘だったのか？

「嘘ではないな。親戚はいても、引き取ってくれる親戚はいなかっただけだ。きつと、その遺骨野郎は親戚連中と縁が切れてたんだろ。よくある話さ。血縁だからと言って、ずっと疎遠だった奴の遺品やら遺骨やらをいきなり渡されて、喜ぶ人間がいると思うか？」

猪口先輩の指摘通り、僕にとってはまだただ迷惑でしかなく、親戚に巡り会えた喜びなど微塵もない。

「なんで引き取っちゃまったんだよ。そんなお荷物」

「しよがなかつたんですよ。受け取るまで帰してくれなごうな雰囲気だったから」

「そりゃ、お前がはつきりノって答ええないからだろう。だから警察もイエスって言わせようとして押しも強くなるんだ。まあ、お前らしいよ。この前だって……」猪口先輩は食後の一服として煙草に火を点けた。彼の口から吐き出された白い煙から逃れようと、顔を横に向けたが、定食屋全体が白い煙に包まれていて、ほとんど効果はなかった。「お前の態度がはつきりしないから、課長からも協力会社からも怒られるん

だぞ」

「……すみません」

昔の失敗を思い出して胃が痛くなるのを感じつつ、猪口先輩に頭を下げた。

僕や猪口先輩の仕事は、ITシステム開発の上流工程と呼ばれる部分で、顧客企業の要望を聞き出し、それを実現するITシステムの仕様と設計を作成することだ。それ以降の実際のプログラム開発は外部の協力会社にやってもらう。

半年ほど前、僕が担当していたとあるITシステム構築案件で問題が発生した。仕様が決まり協力会社が開発を開始したが、その後、顧客が仕様の変更を要求してきたのだ。一度ならともかく、それが何度も行われるものだから、協力会社は不信感を募らせ、このままでは納期に間に合わないと訴えてきた。顧客を神とするならば、協力会社は一般民衆。そして僕たちは神と民衆を結びつける、預言者といった立場であり、彼らの間を円満に取り持たなければならぬ。その民衆からの訴えは大変理にかなったものであり、僕は顧客に相談を持ちかけた。仕様変更をして納期をずらすか、納期を守るために仕様変更を諦めるか？ しかし、神は、納期は厳守、仕様変更も必須でなければ意味がないと宣った。しかも、よくよく神の話に耳を傾けると、その要求は大変理にかなったものであると思えてきて、気付けば僕は説得させられてしまっていた。当然、協力会社は納得しなかった。落とし所を見つげようと、顧客と協力会社の話に何度も耳を傾けている間に、何も決まらないまま納期が迫ってしまった。結局その案

件は、途中から猪口先輩が手伝ってくれたおかげで何とか完了することができたが、課長からは大目玉を食らい、協力会社からはもつとちゃんとして下さい、と注文をつけられてしまった。人々を愚衆と罵る神と、神を邪神と非難する民衆の間を取りなそうとして、結果両方から石を投げられてしまつたわけだ。

その時、猪口先輩は、悪いのは顧客でも協力会社でもなく、人の話を聞いてばかりで自分の意見を言わない僕が悪いと指摘した。先輩の言わんとすることはわかる。しかし、自分の意見を伝えるのはどうも苦手だ。両親が亡くなったあと、親戚の家で、荒波立てないよう息を殺して生きてきたことが原因の一つかもしれない……。

「それにこの前だって」白煙を吐きながら猪口先輩は続けた。「断り切れずに課長と一緒に常務のところの通夜に行つたんだろ。それも同じだ」

「でもあれはしようがないじゃないですか。業務命令つて言われたら」

「そうならないように、立ち回ることが大事なんだ」

そう言う猪口先輩は、課長から面倒な仕事を押し付けられる回数が極端に少ないと、課内でも有名だ。通夜の時だつて一人さつさと逃げ出したのだ。なのに、上層部や顧客からの信頼は厚い。彼のような人間を生き方上手というのだろう。僕とは正反対だ。

「おっと、だいぶ話が逸れたな」猪口さんは二本目の煙草に火を点けた。「で、どうするつもりなんだ。その骨壺？ ド

ブ川にでも捨てたらどうだ」

「本当はそうしたいけど、警察からは死体遺棄になるからって釘を刺されてるんです」

「じゃあ、他に当てるはあるのか？」

「しようがないから、どこかの納骨堂に預かってもらおうかなつて、思ってます」

「それなりに金がかかるんだろ」

「まあ……」

昨日軽く調べたところ、墓を建てた場合は一年分以上のポーンナスが、安い納骨堂に預かってもらった場合でも冬のポーンナスは消えてしまうようだ。こんなことに使うぐらいなら、トラのためにキャットタワーを買ってあげたい。

「それでいいのか？」と、猪口先輩。

「しようがないじゃないですか。捨てられないし、それに一応親戚ですから」

「そんなに深刻にならなくても、もつと気楽に考えたらいいだろ。他の親戚たちはみんな拒否した骨だぞ。さっきも言つたけど、この手の話は多いらしいからな。最近は、格安で処分してくれるサービスもあるらしい。調べてみたらどうだ？」

「処分……」

猪口先輩の不要物を捨てるような言い方に一瞬だけ心が痛んだが、誰よりもあれを処分したがつているのは僕の方だ。先輩へ嫌悪感を抱く資格などない。

「ありがとうございます、今度調べてみます」
お礼を言って、僕たちは定食屋を後にした。

現在担当している案件が佳境を迎えていることもあって、日の出とともに出社し、終電間際に退社するという生活を続けていたら、瞬く間に一週間が過ぎ、日曜日になっていた。

餌を求めるトラの鳴き声で目が覚めても、体中がだるくて、ベッドから起きられなかった。一週間分の疲れがどっと押し寄せてきたようだ。昼前になってようやく体を起こし、トラの食事皿にキャットフードを入れた。自分も朝食兼昼食を求めて冷蔵庫を開けたが、ペットボトル一本入っていないかった。しかたがないので買い出しついでに外食することにした。外は晴れていたが寒そうだ。羽織るものを取り出そうとクロージェットを開けたら、例の木箱が目に入ってきた。

もともと怠かった体が更に重くなり、はーつとため息が漏れた。早いところ何とかしなければ。ただでさえ狭い1Kアパート、余計なもの置いておきたくないし、それにこんなものを毎日見せられても気が滅入るだけだ。

アパートを出て、十分ほど歩いて駅前のハンバーガーショップにやってきた。先週の日曜の昼もハンバーガーだったよ。うな気もするが、選択の余地はない。一番安いセットを注文し、友人や家族連れで賑わう中、一人用席に腰を下ろした。

ポテトをかじりながら、僕はスマホを取り出した。ニュースサイトを軽くチェックしてから、猪口先輩から教えてもらった遺骨の処分サービスについて検索した。

予想以上のヒット数に、コーヒーカップを持つ手が止まっ

てしまった。

———こんなにあるのか……。

葬儀会社やお寺、それに清掃会社やITベンチャーまでが似たサービスを展開していた。利用者は遺骨を業者に送るだけ。後は良しなに葬ってくれるらしい。オプションも豊富だ。海や原っぱへ散骨するものや、樹木葬などがある。戒名を付けてもらうことだってできるらしい。永代供養してもらうにしても、他の遺骨と一緒に合祀してもらう方法なら、墓や納骨堂に入れるよりもずっと安上がりだ。

墓を建てるか納骨堂に預ける以外の選択肢しか知らなかった僕にとっては、驚きの連続だった。サービスの多さを裏返せば、遺骨を手放したいという需要がそれだけたくさんあるというわけだが……。

そう言えば、久しく両親の御参りに行っていないな、ということを思い出した。今住んでいるところから納骨堂のある寺まで遠いし、仕事が忙しいという理由もある。それに、訪れる者がほとんどいなかった両親の葬式、直後に引き取られた親戚の家での息苦しい生活……。辛い日々を思い出してしまいそうで、なかなか足が向けられない……。

今はそんな感傷に浸っている余裕などない。死者のことを思うより、自分が今を生きていくことだけで精一杯なのだ。会社の給与は決して高くなく、貯えだって微々たるものだ。自分の身に何かが起こった時に助けてくれる人もいない。

やはり、見も知らぬ人の遺骨のために大金を払うことなんてできない。一番安い送骨サービスを選ぶ、その一択だ。

不意に、スマホが震え始めた。電話だ。僕に電話する人間などまじくないのに……。発信者を確認すると、へネコネクト 鷺見さん」と出ていた。

「あっ！」

今日の午後一に予定を入れていたことを思い出した。僕はすぐに通話ボタンを押した。

『もしもし、鷺見ですけど』スピーカーの向こうから、聞き慣れた女性の声があった。『今、家の前に来ているんですけど、インターフォンを押しても返事がなくて』

「すみません。外出してました。すぐに行きます」

『わかりました。お待ちしています』
通話を切ると、大急ぎでハンバーガーショップを出た。

5

アパートに戻ると、僕の部屋の前に、秋物のベージュのコートを着て長い髪をお団子ヘアにまとめた女性が立っていた。「すみません。寒いなか待たせてしまって、本当にごめんなさい」

「いえ、大丈夫です」女性も謙遜した様子で、胸の前で手を振った。「じゃあ早速ですがお願いします」

「わかりました」

玄関の鍵を開けてアパートの中へ入る。続いて女性も中に入ってきた。

「トラ」

飼猫の名を呼ぶと、奥からドンツと何かが倒れるような物音がした後、トラが小走りで玄関に現れた。トラは僕とその後ろにいる女性の顔を見て、「にゃあ」と嬉しそうに鳴いた。女性が前に出てトラを抱え上げた。彼女は自分の鼻先を猫の鼻先にくっつけた。

「こんにちは、トラくん。元氣そうだね」

彼女の名前は鷺見叶恵。

彼女との出会いはトラとの出会いでもあった。

半年ほど前、僕は例の炎上案件のせいで連日の終電帰り。それと一向に収束しない花粉のせいで、日曜は外に出るのがとにかく億劫だった。しかし、冷蔵庫は空。空腹を満たすため、体に鞭打って外出せざるを得なかった。しかし、スーパーマーケットやファストフード店が集まる駅前にとどり着く前に、寝不足による頭痛と花粉のダブルパンチによって、立つてられないほどの息苦しさで吐き気に見舞われた。どこかへ避難しようとする周囲を見渡す。幸い小さなカフェを見つけた。普段使っている道から見えているのに、今までまったく気付かなかった。早速店へ向かって歩き始めたが、入り口の前まで来て足が止まってしまった。その店は、チェーン店の誰が入りやすいカフェとは異なり、純喫茶のようなレトロな外見をしていて、常連以外お断りの雰囲気を感じられたからだ。立っているのも辛い、店に入るのも辛い。決められないまま立ち尽くしていると、純喫茶のすぐ横にあった、〈保護猫譲渡会実施中〉と書かれた幟が目に入ってきた。保護猫という言葉はネットでも見たことがある。何らかの

理由で飼い主やペットショップから捨てられて、保健所で殺処分になるところを保護された猫のことだ。そんな猫たちの飼い主を探す会が、純喫茶が入っている建物の二階部分でやっているようだ。

前方からスーパリーの袋を持った中年女性が歩いてくるのが見えた。こんなところでいつまでも立ち止まっていたら不審者として怪しまれてしまう。純喫茶の扉と幟を見比べて、建物の外付け階段を登った。

二階には入り口が一つだけあって、その横にある大きなガラス窓から、中を覗いた。十五畳ほどある部屋の半分が、腰ほどの高さがある木製の柵で仕切られ、その奥に二十四匹ほどの子猫がいた。猫たちは毛布にくるまっていたり、毛玉で遊んでいたりと、数匹の猫たちでじゃれあっていたりして、要するにとてつもなく可愛かった。あまりにも可愛すぎて、言葉が見つかからない。吸い込まれるように部屋の中へ入った。柵の外には僕の他に一組の老夫婦がいたが、彼らも目尻を垂らして猫たちの愛くるしい姿に見入っていた。

眠気も花粉症も空腹も忘れて、僕は猫の姿を目で追った。見れば見るほど心が癒されていく。こんな猫たちと一緒に暮らせたら、辛い仕事だって頑張れるんじゃないだろうか……。ふと、部屋の隅にいる茶縞の猫の姿が目に入ってきた。その猫は他の猫や人の目から逃れるように身を縮めていた。

その猫と目が合ったような気がした。次の瞬間、強烈に胸を締め付けられたような感覚に襲われた。直後、身体中の力が抜けて、危うくその場で崩れ落ちそ

うになった。

他の猫ももちろん可愛い。でもあの猫は格別だった。見つめられただけで、真夏のアイスクリームのように身体中が瞬く間に溶けてしまいそうだった。

——あの猫と一緒に暮らしたい。

「あのう、ご興味ありますか？」

突然のことに、危うく奇声を上げそうになった。恐る恐る声が出た方へ振り返ると、アイボリー色のエプロンを身に着けた、僕と同じ年くらいの女性が立っていた。

僕は茶縞の猫を見た時と同じくらい、しばしの間、彼女に見惚れてしまっていた。

「気になる猫はいましたか？」

女性の問いかける声で、ようやく我に返った。

「あつ、えつと……。はい、あの猫が可愛いなって」

部屋の隅にいる茶縞の猫を指差した。

「良ければ、触ってみますか？」

「い、いいんですか？」

「もちろんです」

女性にはっこり笑うと、僕を柵の中へ誘ってくれた。物陰に隠れていた茶縞の猫を女性はゆっくりと抱え上げると、僕の前に差し出してきた。

「どうぞ」

僕は引つ掻かれたりしないだろうかと不安に思いながら、恐る恐る猫を受け取った。ふわふわで柔らかい。力一杯握り締めたら潰れてしまいそうだ。猫は僕の方を見て、「にゃあ」

とか細い声で鳴いた。可愛さのあまり鼻血を吹き出しかけた。一瞬でも気を緩めたら、卒倒してしまいうさだ。

猫は目を閉じると、僕の両腕の中でスースーと寝息を立て始めた。

「こんなにすぐに懐くなんて、珍しい」茶縞の頭を撫でながら女性は嬉しそうに言った。

「そうなんですか？」

「ええ。この猫、臆病だから」そして女性は僕の目を見た。

「どうです、この猫と一緒に暮らしてみませんか？」

この時の茶縞の猫がトラ、そして女性が鷺見さんだった。

それから僕は、鷺見さんに連れられて、奥にある事務スペースにやってきた。そこにはぶかぶかのジャンパーを着て、濃い髭面に真っ黒なサングラスをかけた中年の男がいた。彼はこの譲渡会を主催するNPO法人ネコネットの代表理事、名前は蜂谷といった。

彼は僕が書いた申込書にざっと目を通した後、ドスを効かせた声で言った。

「一度飼うと決めた以上、どんなことがあっても最後まで面倒見ねえと承知しねえからな。もし飼えるかどうかわかんねえなんて生半可なこと思っているんだっただけならすぐに帰れ」

「……」

NPOの理事というよりヤクザの幹部のようだ。

「君は独り暮らしだろ。それなのにちゃんと面倒みられるのか？」蜂谷氏はサングラスを下げ、上目遣いで僕の顔を見てきた。「それに、金もかかるぞ、餌代はもちろん、もし病氣

になれば何十万って治療代も必要だ。そうなった時、君に払えるのか？」

「……そ、それは……」

蜂谷氏の姿が激昂した時の鷹野課長と重なって、口の中の水分が一気に蒸発していった。

「なんだ、黙っていたらわからんだろう。はっきり答えろ！」今すぐ逃げ出したいくなった。どうして猫を飼うためにこんな怖い思いをしないといけないのか？

すると、それまでトラを抱えて僕たちの様子を見守っていた鷺見さんが口を開いた。

「蜂谷さん、もうそれくらいにしてください。せっかく貰い手になってくれるっていうのに、また逃げられちゃいますよ」

「おっと、すまん。つい昔の癖で……」

彼女の一言で蜂谷氏は大人しくなった。鷺見さんの助け舟に僕は心底ほっとした。彼の言う、昔の癖が少し気にはなつたが……。

鷺見さんは言った。「ごめんなさい、雀部さん。うちの理事は別に脅してるわけじゃなくて、娘を嫁に出す父親みたいに、心底猫のことが心配なんですよ」

「はあ……」

それを理解しろというには、蜂谷氏の態度は少々無理がある。

「でも、蜂谷さんの言っていることは全部本当です。動物を飼うっていうのは思っている以上に大変です。わたしたちの目的って、この猫たちを殺処分から救うことだから、新しい

飼い主がまた捨てちゃったら意味ないですし。雀部さん、この猫をちゃんと最期まで面倒を見ると、誓ってくれますか？」

鷺見さんの表情から、その真剣さが痛いほど伝わってくる。本当に僕に飼えるだろうか？ 特に金額面については正直のところ少し厳しい気がする。しかし、鷺見さんが抱きかかえる茶縹の猫と目が合って、運命めいたものを感じてしまったのだ。

「ちゃっ、ちゃんと飼います」僕は答えた。「仕事に行くときも、ちゃんと餌と水は絶やさないようにします。病気になるれば、病院にも連れていきます」

「それで十分だと思ってるのか？」再び蜂谷氏が口を開いた。「食わせてばかりじゃ、あつという間にデブ猫になるだろ」

「えっ！ あつ、その……、休みの日は遊んであげます」

「まだ足りねえな」

えっ、何が？ これ以上何が必要なの？ 蜂谷氏は腕を組んで顎をしゃくると、見下ろすような視線を僕に向けてきた。緊張と恐怖でこれ以上は耐えられそうになかった。しかしその時、毛糸のボールを指差す鷺見さんの姿が見えた。彼女の言わんとすることをすぐに理解できた。

「えつと……。この猫が飽きないように、遊び道具もちゃんと用意します」

しばらくの間、代表理事は黙っていたが、出し抜けに、席から立ち上がるとサングラスを外した。

「雀部さん。どうかこの猫の面倒、末永く見てやってください。お頼み申します」

そう言って、蜂谷氏は組長を前にした組員のように、深々と頭を下げてきた。

こうして、謎の圧迫面接(?)をパスし、いくつかの条件付きで晴れてトラを譲り受けることができた。その条件の一つが、定期的にNPOの訪問を受けることだ。ちゃんと猫を飼うことができていくかチェックするためだという。

だから今日、鷺見さんが僕の家を訪れた理由は、僕に会いに来たわけではなくて、トラに会いに来たというわけだ。しかし僕としては、どんな理由であれ鷺見さんに会えることがとても楽しみだ。トラを見ていくと心が穏やかになれるが、彼女を見ていくと心が熱くなってくるのを感じる。

鷺見さんはトラの体をあちこち触りながら、健康状態をチェックする。

「うん……大丈夫そうですね。それに体重もだいぶ増えるし。お前、よっぽどおいしいものを食べさせてもらってるな」

「にゃあ」

鷺見さんの質問に答えるように、トラが鳴いた。

「ただの、ペットフードですよ」僕は答えた。

「それで十分です。最近のペットフードは栄養満点で、味も良いですから」

「えっ、食べたことあるんですか？」

「まさか」鷺見さんは笑った。「でも猫たちの食べている姿を見ればわかります」

鷺見さんはまるで自分が猫自身であるかのように、猫について詳しい。心の底から猫が好きに違いない。しかし彼女に

言わせれば、蜂谷氏の猫溺愛には敵わないらしい。まあ、そうでなければ、ほとんどボランティアに近い里親探しのNP
O理事など務まらないだろう。

鷺見さんは訪問記録としてスマホでトラの写真を撮った。

トラはファッションモデルのように、つんと鼻を高く上げた。

これで鷺見さんの仕事は終わりだ。僕は礼を言った。

「いつも来てくれて、ありがとうございます」

「良いんですよ。わたしもトラくんに会いたいですし。……

あっ、そうだ。雀部さんにこれを」

鷺見さんは鞆から葉書サイズの紙を取り出して、僕に手渡してきた。

「猫友会の案内状です。どうですか、一度来てみませんか？」
猫友会とは、ネコネットが定期的に開催する飼い主同士の

オフ会だ。猫を飼う苦労や喜びを分かち合うためのものらしい。保護猫を助けるだけではなく、猫を通じて地域の人々を繋げる。これがNP Oの理念だという。

「うーん……」

僕は案内状に目を通したまま、小さく唸った。人の集まる
ところに行くのは正直苦手だ。それに僕はトラが好きさだけ
であって、ほかの猫の自慢話など特に聞きたいとは思わない。

「考えさせてください」

結局、僕はいつもと変わらない回答をした。

「そうですか」鷺見さんの口角がわずかに下がった。「じゃあ、わたしはこれで。何かあればなんでも相談してください」

そう言い残し、鷺見さんはアパートを出ていった。

僕は閉じられた扉を見つめた。

鷺見さんの滞在時間は三十分に満たない。

「せっかくだから、お茶でも飲んでいってください」

そんな一言が、彼女に言えたらいいのに……。

6

玄関を上がると、居間の床の一部が塩か砂糖でもこぼした
ように、白いもので覆われているのに、気づいた。駆け寄る
と、クローゼットが開いていた。昼食に出かける前はまだ意
識が朦朧としていて、閉め忘れてしまったのだろう。

そして、例の白い物体はクローゼットを中心に飛び散って
いた。

——ま、まさか……。

クローゼットの中を覗き込むと、例の骨壺の入った木箱が
倒れていて蓋も開いてしまっていた。どうやら、クローゼッ
トに忍び込んだトラが倒してしまったのだろう。昔はとても
怖がりだったのに、今ではすっかり好奇心旺盛に育っている。
喜ばしいことだが、ハラハラすることも増えてきた。

「トラ……、こいつに触っちゃダメって言っただろ」

注意したものの、耳にはまったく入っていないようで、白
いものに鼻を近づけて、クンクンと匂いを嗅いでいた。

うんざりした気分ですらに散らばった白い灰を見渡した。ほ
とんどは砂のように細かくなっているが、ところどころに大
きな塊もあった。僕は反射的に目を逸らした。

ああ、本当に忌々しい。骨壺のせいで貴重な休日を奪われ、これからお金も奪われることになり、あまつさえ僕の部屋も散らかってしまふのだから。

このまま掃除機で全部吸い取って、他のゴミと一緒に捨ててしまいたい、さすがにそれはできない。犯罪者になってしまふし、たとえカルシウムの塊になってしまったとはいえず、元は人間だったのだ。そこまで粗末に扱ふのは、やはり抵抗を覚える。

とにかく、部屋を掃除しようと、僕は骨壺を持ち上げた。灰は塵取りで集めるとしても、大きな塊は手で拾う必要がある。大腿骨の一部だと思われる所々黄ばみを帯びた塊に手を伸ばしかけて……、やっぱりひっこめた。素手で持つ気にはなれなかった。確かどこかに軍手があったはず。探そうと立ち上がった時、ずっと興味深そうに灰の匂いを嗅いでいたトラが、おもむろに口を開き、長い舌を出した。

「トラ、ダメー！」
咄嗟に止めようとしたが遅かった。トラは灰を舐めてしまった。

「何してるんだ。べっ、しなさい。べっ！」
トラの首や頭をさすって、吐き出させようとしたが、トラは何事もなかったかのように、ぺろぺろと口まわりを舐めていた。

「大丈夫なのか？ 猫はもともと雑食で、ネズミも虫も食べるから、灰を口にしたところで体を壊したりはしないだろうけど……。祟られたりしないかな？」

すると突然、トラが口を大きく開いて、はあっ、はあっと不自然な呼吸を始めた。何かを吐き出そうとしているようだ。「だっ、大丈夫、トラ？」

やっぱり、猫にとっては毒か何かだったのだろうか？ それとも祟り？

僕はトラの背中を何度もさすったが、呼吸はどんどん荒くなっていく。

ど、どうしよう……。動物病院に連絡するか、それとも鷲見さんに訊いてみるか。彼女はまだ遠くまで行っていないだろう。直ぐに来てくれるはず。僕はスマホを手にして、連絡帳から鷲見さんの番号を探す。

「にゃあーっ！」
トラが苦しそうな声で鳴くと、床に倒れ、左右に激しく体を転がし始めた。

「トラ、トラッ！」
何度も名前を呼ぶが、トラの動きは収まるどころかますます酷くなっていく。明らかに異常な状況。まさかこのまま、死んでしまうんじゃないか？

「トラ、死なないで！」
祖母の、そして両親の遺影が脳裏をかすめた。唐突に、トラの動きがぴたりと止まった。

「……トラ？」

沈黙。

窓の外からかすかに「竿竹、竿竹要らんかね」と声が聞こえてきた。

猫の耳がびくりと動き、ゆっくりと体を起こし始めた。「大丈夫、トラ？」

首を左右に振るトラに向かって声をかけると、トラは僕の顔を見上げた。

ああ良かった。トラは無事だった。

ほんと安堵した直後、確かに僕は見て、そして聞いた。

トラが口を開き、

「おつ、ここは異世界なのか？」

と言ったことを。

1

俺の最後の記憶は、自分の部屋でテレビを見ていたことだ。最近のバラエティー番組にはついていけない。途切れることなく笑い声は聞こえてくるのに、どこが面白いのか、俺にはさっぱりわからん。

——つまりなら、テレビなんて見なければ良いのに、だつて？

そりゃあ、他に何もすることがなかったからに決まつてるだろ。大した趣味なんてねえから、外出するっていつたつて、スーパーカー、パチンコ屋くらいだ。でも、金がないから、結局、テレビで時間を潰すくらいしかやることなかったんだ。

——何、仕事？

嫌なこと訊いてくるねえ。まあ一応、すこし前まで、コンビニのバイトしてたんだけどよ。その店長がどうしようもない奴で、愛想が尽きて辞めたんだ。なんだ、その疑う目は本当だぞ、こつちから辞めてやったんだ。俺という稀有な人材を失って、今頃は相当後悔してるだろうさ。ざまあみろ、あのハゲジジイ。……って、話が逸れたな。

とにかく、俺はテレビを見てたんだが、喉が渴いたから、台所へ酒を取りに行こうとしたんだ。で、立ち上がった時、突然胸に激しい痛みが襲ってきやがった。今まで感じたことがねえくらいの激痛で、とても立っていられなかった。病氣

のことは何もわからねえけど、そんな俺でもこれはヤバイとすぐにわかつたさ。とにかく助けを呼ぼうと、机の上に置いてある携帯に手を伸ばしたんだが……、すぐに気づいたんだ。俺の助けにに応じてくれるような連中の連絡先なんて、一つも登録されちゃいねえって。それでも、玄關まで這っていこうとしたんだが、胸の痛みはますます強くなって、手も足も力が入らねえ。大声で叫ぼうにも、喉を詰まらせたカラスみたいな声しか出せなかった。次第に意識が朦朧としたして、ああ、俺ここで死ぬんだって、その時はつきりと理解した。テレビからは苦しむ俺をバカにするような、卑近な笑い声だけが聞こえてきたんだ。

——えっ、さつきから何言ってるんだ？ 結局、お前は誰だ？ だと。

お前の方こそ何言ってるんだ。俺は……って、そういやまだ名乗ってなかったな、はっはっはっ、悪い悪い。俺の名前は六原之雄だ。……ん？ どうした、そんな幽霊と遭遇したような目で俺を見て……。確かに、俺はどうして今ここにいるんだ？ 念願の異世界に転生したわけじゃ……なさそうだしな。ってことは俺、地縛霊か何かになっちゃったのか？ それにしちゃあ、ずいぶん体がもふもふして、尻の方も余計なものが付いている感じが……って、この体は猫じゃねえか！ そうか、俺は猫として畜生道に輪廻転生……。

——違う？

この白いやつ、俺の骨？ へえ、案外綺麗だな。……なるほど、それをこの猫が舐めた直後に……。じゃあ、それが原

因かもな。さしずめ猫に乗り移った地縛霊ってところか。

——んっ？ 驚かないのかって？

確かに突飛すぎる話だけど、世の中は俺たちの知らない不思議なことで満ち溢れてるから、そういうこともあるんだろう。俺くらしいの歳になると、ちよつとやそつとのことじゃ感動しないんだ。

そんなことより、お前は どうして俺の骨を持ってるんだ？
って、そもそもお前こそ誰だよ！

——雀部悠。俺の親戚？

知らねえなあ。俺も親戚とはほとんど付き合いがなかったから。それで……なるほど、警察から骨を半ば強引に渡されたのか。……えっ、マジで！ 俺が死んでもうそんなに経ってるのか。ひいふうみい……ちよつと、この手……いや、前足か、これじゃうまく数えられないな。とにかく、死体が発見された時、俺の部屋は悲惨な状況になってただろうな。蛆がわんさか湧き出して……。おっと想像しただけで吐き気がしてきた。とにかく、大家には迷惑かけちゃったな。あの人だけは俺のこと心配してくれてたから。恩を仇で返してしまわなくて、それだけが心残りだ。

でもまあ、過ぎたことは仕方ねえ。来世にも異世界にも行きそびれちゃったんだ、これからどうするか考えねえと。と言っても、できることなんて限られてる。お前、雀部悠とか言ったな、しばらく厄介になるぜ。……なんだよ、その嫌そうな目は。心は六原之雄だけど、この体はお前の大切な猫だろ。俺を放り出すってことは、この猫を放り出すってことに

なるんだぞ。それは嫌だろ。

じゃあ、よろしくな、俺の飼い主様。

呆気にとられている間に、全てが決まってしまった。

遺骨の人物である六原之雄を名乗った地縛霊が、トラの体に乗っ取り、その上、面倒までみると要求してきたのだ。夢なら醒めろと何度も頬をつねってみたが、もちろん痛かった。信じがたいことだが、これが現実のようだ。

不本意ながら受け入れざるを得なかった。トラを寒い空の下へ放り出すことはできない。

「とりあえず、僕は頭の整理も兼ねて散らばっていた遺骨を片付け始めた。

トラ……の体に乗っ取った六原さんは、ひらりとベッドの上へ飛び乗った。

「四本足で歩くのは、新鮮だな、それに体も軽くなった感じがする。悪くない」

それから彼は小走りで居間を回り始めた。

「それにしても、しけた部屋だな。ローテーブルにノートPC、それに壁にはシンプルな掛け時計一つだけ。最近の若い奴の部屋っていうのは、もっとこう、華やかかって言うか、いろんなシャレオツな物で溢れてるんじゃないのか？」

「余計なお世話です。僕は綺麗好きなだけなの」鎖骨を拾い上げながら、答えた。

「どれどれ……」六原さんは居間と台所の敷居の前で立ち止まり、前足でさっと撫でて肉球を眺めた。「確かに塵ひとつ

落ちてない。俺の部屋とは雲泥の差だ」

続いて六原さんは、開いたクローゼットの中へと入っていく。「ほう、表面だけ綺麗にしてて、裏は全然片付いてないって奴も多いのに、ちゃんと整理されてるじゃないか。感心感心」

「あなたは僕の姑なの……、って、何やってるの！」クローゼットの中に置いてある収納箱を、六原さんが爪でガリガリと引っ掻き始めたので、慌ててトラの体を持ち上げた。

「脇はやめろ！」六原さんが体を左右に激しくひねり、僕の手から逃れていった。「いきなり持つなよ。びっくりするし、くすぐったいだろ」

「トラなら、いつも喜ぶんだけど」

六原さんは全身をブルリと震わせた。「俺はトラじゃねえ」「そんなことより、箱を引っ掻くのはやめてよ」

「探し物してたんだ」

「何を？ もしかして、この遺品箱？」

遺骨と一緒に受け取った、片手で持てる程度の小さな箱を、クローゼットから取り出した。

しかし、六原さんは首を振った。「なんだよそれ、どうせガラクタだろ、興味ねえな。男の一人部屋の探し物とくりや、相場は決まってるだろ。最近の若者は何を使ってるんだ？」

「何を使ってる……あっ」六原さんの意図をようやく理解して、啞然とした。「恥ずかしい、中高生みたいなことやらないでよ」

六原さんは四十代も後半だったはず。しかも、出会った直後の話題がこれだ。大人気ないにも程がある。

「何を言っているんだ」六原さんはチツチツと尻尾を左右に振った。「何歳になっても童心を忘れず好奇心を持ち続けることが、長生きの秘訣さ」

「死んでるじゃん、あんた！」

「確かに！」六原さんはゲラゲラと笑い出した。

大丈夫かな、この人……。僕は本気で心配し始めた。さっきも異世界転生だとか連呼してたし。猫に乗り移るなんていう超常現象に遭遇して正気を失っているか、それとも、単に精神年齢が低いのか？

「それはともかく……」六原さんは言った。「ちよつとおじさんに見せてみなさい」

この話、まだ続くらしい。この人、ただのエロオヤジだ。

最初は無視して、片付けを続けたが、しかし六原さんは尻尾で僕の腕を突いて、注意を引いてきた。すっかり猫の体に順応していらつしやる……。

「無視するなよ。いいじゃねえか、減るもんじゃねえし。お前の性癖の秘密はちゃんと守るから」

面倒くさい……。仕方なく僕は答えた。

「そんなもの、クローゼットやベッドの下を探したって見つかからないよ」

「なっ、なんだって！」六原さんは宇宙の果てを目撃したかのように目を丸くした。「いや、まさか、お前本当は……」

「違う。そういうのはここに入っているの」

ローテーブルに置いてあるノートPCを指差す。

「マジか」六原さんはテーブルの上に飛び乗った。「なんだよ、猫も杓子もデジタルデジタル、ロマンがないねえ。もつとリアルに興味を持ちなさい」などと言いつつ、彼はPCの電源を入れようとした。しかし、その肉球が大き過ぎて、電源ボタンを押し込めなかった。

「ちっ、なんだよこの手は。これじゃあ、何にもできねえじゃねえか」六原さんはパンパンと前足をテーブルに打ち付けた。

彼が僕のPCで何をしようとしていたか、あえて訊かないことにして、片付けを続けた。

頭が痛くなってきた。骨壺を押し付けられただけでも十分頭痛の種なのに、その骨の主人が僕の飼った猫に乗り移るわ、その上延々と不毛な話を聞かされるわ……。熱が出てもおかしくない。今日は早めに休もう。そんなことを考えていたら再び六原さんの声がした。

「おい、腹が減った」

「えっ？」時刻を確認すると、もう午後の六時を過ぎていた。六原さんのせいで随分と無駄な時間を過ごしてしまった。

「なあなあ、なんか食わせてくれよ」ふさふさの毛並みで僕の足にすり寄ってくる六原さん。

「そんなこと言われても……」

何を食べきせたらいいものか？ 心は人間とはいえ体は猫であるならば、普段トラが食べているものが良いだろう。台所へ向かい、トラの食事皿にキャットフードを入れた。

「どうぞ」

「お前、舐めてんのか！」六原さんは全身の体毛を逆立てて、「フーッ！」と唸った。「体は猫だけ心は人間だぞ。こんなもの食えるか。俺は人間の権利として、文化的で最低限度の生活を要求する！せめてマグロの刺身にしろ」

「そんな……」

しかし、ここで六原さんに逆らって、食事を拒否されてしまったら、辛い目を見るのはトラの体だ。従うしかなかった。近くのスーパーへ買い出しに行こうと玄関へ向かうと、六原さんは更に注文をつけてきた。

「もちろん刺身は国産な。あと、できればビールも。発泡酒とか第三のビールじゃなくて、ちゃんとしたビールな」

2

「……部、雀部！」

名前を呼ぶ声に気づいて、慌てて顔を上げた。声の主は隣の席にいた猪口先輩だった。

「何やってる。課長が呼んでるぞ」

「えっ」

全然気づかなかった。というかしばらく意識が飛んでいた。急いで課長席へ向かう。

鷹野課長は厳しい視線を僕に寄越してきた。

「呼ばれたらすぐに来いって、いつも言ってるだろ。ぼーっとしてるから、客からは怒られるし、協力会社からは舐めら

れるんだ。シャキッとしろ、シャキッと」

「す、すみません」

ちっと舌打ちを一つ入れてから、課長は続けた。「今、お前が担当してる○○商事の案件、もうすぐ終了だよな」

「はい、受け入れテストも順調に進んでいます。問題なく検収してもらえますかと」

「じゃあ、これ」と言って、鷹野課長は百科大事典並みの分厚いバインダーを僕に差し出してきた。「お前の次の仕事な」
「わかりました」手を伸ばし、バインダーに人差し指が触れた瞬間、ヒヤリと不自然な冷たさを感じて、反射的に動きを止めた。

しかし、課長が無理矢理、僕の腕に押し付けてきた。

「ボサボサするな、早く受け取れ」

「これ、どういう仕事ですか？」

課長は再び舌打ちした。「中に全部書いてある。そんなこといちいち訊くな。わかったらさっさと仕事に戻れ」

取りつく島はなさそうだと、とても重量のあるバインダーを持って席に戻った。

「また、災難なことだ」猪口先輩が僕の腕に抱かれたバインダーを見て言った。「それ、間違いなく炎上確定案件だな」

「はい、多分……」

予算や納期が極端に少ない、あるいは顧客がその地位を乱用して次から次へと無理難題を押し付けてくるなど、厄介な仕事の時々やってくる。入社直後は現場が焦土と化した時に初めて危険な仕事だったと理解したが、最近では仕事を割り

振る時の課長の態度でなんとなく察しがつくようになっていた。

「しばらく、終電帰りが続きそう」

「そりゃ、いつものことだろ」猪口先輩が鼻で笑った。「でも雀部、最近特に疲れてるように見えるぞ。課長に呼ばれた時も半分寝てただろ。大丈夫か？」

「はっ、はい……」

寝不足な原因、それはトラに乗り移った六原さんだ。

居候を始めた彼は、キャットフード以外の飯を食わせろだの、退屈だから漫画雑誌買ってこいだの、背中を揉めだの、薄っぺらい猫布団で寝るのは嫌だからベッドは俺のものだなど、亭主閑白の如き振る舞いで僕をこき使ってくるのだ。それに、僕は翌日の仕事に備えるために一刻も早く休みたいのに、六原さんは明け方近くまでテレビのアニメやらバラエティーを観ているせいで、ちゃんと眠れない。おかげで日中は目や頭が痛い。もう少し静かにしてほしいと何度も頼んだが、六原さんは久しく無職が続きほとんど人と会っていないかっただけという割には弁の立つ人で、僕の文句や抗議も屁屈屈じみた反論でいなされてしまう。深夜テレビのことだって、「猫は本来夜行性だろ、心は人間でも体は猫。動物の本能には抗えないのさ。それにお前だって、それを覚悟した上で飼い始めたはずだろ。だから俺に文句を言うのはお門違いだ」なんて言ってくる始末だ。

そして、どんなに腹立たしくても、六原さんのわがままに付き合わざるを得なかった。トラの体が人質（猫質？）に取

られているからだ。六原さんと暮らし始めてまもなく一週間になるが、この苦しい生活は、いつまで続くのだろうか？

「そういうえば、雀部。お前を悩ませてた例の骨壺、結局どうしたんだ？」

また嫌なことを思い出して、胃がちくりと痛んだ。

「結局、まだクローゼットの中に眠ってます」

「なんだ、まだ処分しなかったのか。それも疲れの原因の一つか？」

「まあ、そうですね」僕は頷いた。「どうすればいいのか踏ん切りがつかなくて……」

この前の日曜昼の時点では、適当な回収業者に頼んで一番安い合祀プランで引き取ってもらおうと決めていた。しかしこれも、遺骨の主たる六原さんが降臨したせいで、棚上げ状態になっている。やはりここは、本人の希望を聞いたほうが良いのだろうか？

本当に面倒くさい。どうして僕はこんな貧乏くじを引かされてばかりなのだろう。

お、やっと帰ってきたか。お前んところの会社はそんなに忙しいのか？ 景気が良さそうで結構なことだよ。そんなことよりも飯だ飯。今日は何買ってきた？

——閉店前の割引セールでエビが安かった？

鮮度が微妙だけど、まあ良いだろ。軽く火で炙って、塩胡椒で味付けして、ビールと一緒に食うと、旨いんだよな。

——焼いてる時間はない？ このままで食えだぞ？

おいおい冗談かよ。俺は猫か？ ……つて、猫だったな、今の俺は。でも賞味期限間近で生のまま食ったらきつと腹壊すぞ。それでも良いのか？ ……そうかそうか、焼いてくれるか。助かるぞ。で、ビールは？ ……その話は何度も聞いた。猫にアルコールはご法度なんだろう。でも俺はビールが飲みたいんだ。飲まなきゃ一日が終わったつて気がしねえんだ。俺、体は猫でも心は人間だよ。酒という心の潤いがないと生きる気が湧いてこないんだ。一口…いや、一舐めで良いから。お願いします、扶養者様、お大尽様、仏様！ ちっ…：本当に頭の硬い奴だね、お前は。わかったわかった、今日のところはミルクで勘弁してやるよ、できれば練乳入りで。そういえば、頼んでた漫画雑誌、買ってきてくれたか？ うむ、ご苦労。飯ができたら呼んでくれ。いやあ、飯から漫画まで用意してくれて、まさにいたせり尽せり。飼ひ猫つて良いご身分だな。余は満足じゃ、なんて。おつ、飯が出来たか。よしよし…。うん、なかなかいいぞ。お前結構料理が上手いよな。…高校から自炊してた？ お前、独り親か？ まあ、どうでもいいや。でもきつと良いお嬢さんになるぜ。俺は料理がからきしダメだよ。レトルトカレーとパスタぐらいいしか作ったことがねえ。だからずっと料理が得意な女と一緒にいることに憧れてたんだけど、結果は散々、四十代後半になつても独り身つてわけさ。理想が高すぎたのかもしれないねえな。今のご時世、結婚できるだけで上級国民、子どもを何人も育てられるのは特権階級さ。…つてのはさすがに言い過ぎかもしれないけど、でも俺みた

いなずつと底辺すれすれを生きてきて、誰にも見送られることなく死んじまった奴から見りゃ、結婚も子育ても高嶺の花だつていうのは間違いないぜ。どうしてこうなつちまつたのかな？ やつぱり、旧態依然から脱しきれない企業と、愚策ばかりを繰り出す政治家…：つて、おい、さっきからお前、全然俺の話聞いてないだろ。こういう政治に無関心な若者が多いからこの国はダメになつていくんだつて言つてるんだ。なんだよ、その醒めた目は。ああ嘆かわしい、もう少し情熱つてのがないのかねえ、最近の若者は。

——なんだつて？ 俺の骨？

こつちの話を無視するなよ…。骨つて、あのクローゼットにしまつてあるやつだろ。どうしたいかだつて？ なんだよ、藪から棒に。…：へえ、墓に入れる以外にも方法があるのか、それは知らなかったな。確かに今更両親と一緒に墓に入りたくないなんて思わねえ。

——両親と仲が悪かつたかつて？

まあな、最後は絶縁状態だつたな。俺は両親の葬式にも出てねえし、親戚の顔だつてほとんど覚えちゃいねえ。だから墓に入れようが、納骨堂に入れようが、手を合わせに来る奴なんていやしねえよ。まっ、どうでもいいけど。…：そうだな、適当に海にでも撒いてくれ。

3

その後も、六原さんのわがままは止まるところを知らな

った。飯を作れ、肩を揉め、漫画買ってこい……。彼は僕のことを執事かメイドだと勘違いしてるのではないだろうか。いや、執事やメイドの方がまだマシだ。働いた分だけ給金もらえるのだから。その上、会社で厄介な仕事を割り当てられたせいで深夜残業が続いているのに、六原さんの夜更かしによって、寝不足も続いていて、朝から晩まで頭痛が治まらない。これは、六原さんの世話ではなくて、トラの世話をしているのだ、と自分に言い聞かせることでなんとか耐えているが、フラストレーションは溜まっていく一方だ。

しかし、六原さんに驚かされたこともある。なんと、ノートPCを操作できるようになったのだ。あの肉球がついた前足で、である。ある日仕事から帰ってくると、「どうだ、凄いだろ」と言いながら、爪を立てて器用にキーボードを叩く猫の姿を見た時は、持っていた鞆を取り落としてしまった。動画サイトにアップしたらバズるかも、と思ったが、特に注目を浴びたい欲求はなかったので、それはやめた。

土曜日の深夜、仕事から帰り、もろもろの家事を片づけ、一週間の溜まりに溜まった疲労を表すかのような大きなため息をついた時、六原さんは僕のノートPCで十八禁のブラウザゲームに勤しんでいた。

せっかく身につけた技術、もう少しマシなことに使えないのだろうか、この人は。

ベッドに腰を下ろすと、六原さんは顔を上げた。

「おう、お疲れさん。で、悠。ちよっとお前のクレジットカード貸してくれ。課金したいんだ」

今では、六原さんはすっかり僕のおじさん気取りで（事実親戚なのけど）、下の名前を呼び捨てにしていた。

「ダメ」僕は即答した。

「えーっ、硬いこと言うなよ。この子にリアルマネー千円で買えるネットワークスを贈れば、デートイベントの条件を満たせるんだからよ。悠だって見たいだろ、リリコちゃんのムフフな姿を……」

モニターに映る幼げな女の子の絵に向かって、グへへと涎を垂らして笑う六原さん。

——トラの顔で、そんな下品に笑うな！

「絶対ダメ」僕はもう一度言って、ベッドに寝転んだ。

一刻も早く、元のトラを取り戻したかった。こんな傍若無人で破廉恥な六原さんではなくて、僕を癒してくれる可愛いトラを……。

そのためには、トラの体から六原さんの魂を追い出さなければならぬ。どうやって？ お祓いしてもらおう？

『君にさよならが言えて、本当に良かった……』

ふと、テレビから聞き慣れない声があった。六原さんはテレビを付けたままゲームをしていたようだ。電気代がもつたない。

テレビ画面には少し昔の映画が映っていた。事故で死んだ青年が危機に陥る恋人を助けるため幽霊として現れる話で、映画をほとんど見ない僕でも、粗筋くらいなら知っている。ちよっどエンディングを迎えていて、悪人を倒して恋人を救った青年が成仏するシーンだった。

「これだ！」

僕の叫び声に、六原さんは飛び上がった。

「どっ、どうした急に。やっぱりクレジットカードを貸してくれる気になったか？」

「違うよ」体を起こして、六原さんを見た。「あの、六原さんって、何かやり残したことない？」

「やり残したこと？」六原さんのヒゲがわずかに下がった。

「そりゃもちろん、この子のムフフなシーンを見ないまま今夜を終えることに決まってるだろう」

「いや、そうじゃなくて。生前にやり残したと思ってること」成仏できない幽霊といえば、生きていた時に何らかの未練を残しているというのが定番だ。きつとその未練を晴らしてあげれば、六原さんも成仏して、トラの体から出ていってくれるに違いない。

期待を込めて六原さんの大きな瞳を覗き込んだが、彼は鼻で笑った。

「はっ、何言ってるんだ、突然。そんなのあるわけないだろ。

こんな下らねえ世界に未練なんて欠片もねえな」

「そ、そんなことないでしょ。きつと何かあるはずだよ」

「ねえものはねえんだから、しようがないだろ」

「じゃあ、どうして地縛霊なんかになって、この世に留まってるのさ」

「知らねえよ、そんなこと。俺だって早いところこの世からおさらばして、異世界に転生したいんだから」

「異世界って……。でも、意識してないだけで、きつと何か

心残りなことがあるはずだよ。……あつ、そうだ。初めて会ったとき、住んでたアパートの大家さんに謝りたいとか言っ
てなかったっけ？」

六原さんは二度瞬きしたあと、考え込むように首を垂れた。
「まあな。色々迷惑をかけただろうし……」

「きつとそれだよ。じゃあ明日、その大家さんのところへ行ってみよう」

「ど、どうしたんだ、いきなり。悠、お前、明日の日曜は一日寝るって言ってなかったか？」

「計画変更だよ。ああ、明日が楽しみだね」

ようやく元のトラが戻ってくると思うと、久しぶりに気分が高揚してきた。

4

翌日の日曜日、昼を過ぎて目を開けようとしないう六原さんを無理やり猫用のキャリーバッグに入れて、僕たちは家を出た。目指すは、生前の六原さんが暮らしていた場所だ。

「つたく、面倒くせえな。もっと寝かせてくれよ」

キャリーバッグの中から、六原さんの恨めしげな声が聞こえてくる。明け方までPCゲームを続けていたのだから、そりゃ眠いだろう。一方、僕は久しぶりに目覚めが良かった。

六原さんからトラを取り戻せる可能性が出てきたのだから。

渋る六原さんから、クレジットカードをチラつかせることで、生前暮らしていたアパートの情報を聞き出し、電車に乗

った。休日の電車は、通勤時ほどではないにしろそこそこ混んでいた。

さすがに人前で猫と話すわけにもいかないし、猫が話すわけにもいかない。彼もそのことはちゃんと理解していて、家から駅に着くまではずっと文句を垂れていたのに、電車に乗った途端一言も喋らなくなった。しかし、グーグーと大きいびきがキャリーバッグから聞こえてきた時は肝を冷やした。他の乗客は誰一人いびきの発生源を気にしなかったので、事なきを得たが。

目的の駅に着いた。以前、六原さんの遺骨を受け取った警察署の隣の駅だった。

スマホの地図を頼りに、駅前の商店街を通り抜け、小ぶりなアパートと一軒家が交互に建ち並ぶ閑静な住宅街へ足を踏み入れた。

「アパートは、この近く？」

「まあな」六原さんのむすっとした声が返ってきた。「ったく、またこの街を目にすることになるとはな」

彼の話し振りからするに、かつてのアパートへ戻ることは相当不本意であるようだ。本当にこれで成仏してくれるのだろうか？ そんな不安がよぎったが、必死に脳裏から追いつた。大丈夫、今日で六原さんともお別れし、遺骨もちゃんと処分する。それで元の平穏な生活に戻るんだ。

「……ここだ」

六原さんの声が聞こえ、僕は足を止めた。目の前にある二階建ての建築物は壁が所々黒く煤け、相当な築年数であるこ

とをうかがわせた。

「なかなか年季が入った建物だろ。ここに二十年以上住んでたんだ。改めて見ると、よくもまあこんなところで暮らしていたもんだって、自分でも思えてくるな」

一階の一部屋から男が出てきた。細身で短い白髪の老人だ。老人は僕に目を合わせてきた。

「何かご用ですか？」

「こいつが、この大家だ」と、六原さんの囁く声。

来意を伝えようとしたが、その前に大家が言った。

「もしかして、入居希望者ですか？」

「あっ、いや……」

大家が早足で近づいてくる。「ちょうど今、良い部屋が空いてましてね。是非、見ていってください。さっ、どうぞどうぞ」

「えっ、その……」

「遠慮しなくて結構です。見るだけでも大丈夫ですから」

大家の強引な客引きに、言い返す暇もなく、アパートの敷地へ引つ張り込まれてしまった。そして促されるまま、階段を登った。一階も二階も静かで、人の気配はしなかった。入居率は高くないのかもしれない。

大家は僕たちを二階の一部屋に案内した。

「この部屋なんですけど、ちょうどリフォームしたばかりです。お買い得だと思います」

大家が扉を開ける。

「あのう、実は僕……」

「資料を取ってきますから、好きに中を見学しててください」
大家はこちらの話など聞こうともせず、階段を降りていった。なんと忙しい人だろう。

「相変わらずだな。あの大家は」キャリーバッグから六原さんの声がした。「この部屋、前に俺が住んでいたところだ」

「そうなんだ。だったら中を見てみようか」

僕はキャリーバッグを持って部屋に入った。古びた外装とは裏腹に、内部はよく磨かれたフローリングと純白の壁紙に覆われていて、僕が住んでいる部屋よりも綺麗に見えた。

「どう、六原さん？」

六原さんに何か変化——未練が晴れるようなこと——が起らないかと、期待を込めて訊いたが、かつての住人は特に感慨もなさそうな声で言った。

「ふうん。随分と変わったんだな。俺がいた時は、フローリングじゃなくて畳だったし、それに所々腐ってた。これじゃあ見る影もねえ」

懐かしの家は、六原さんになんの変化も与えなかったようだ。残念。

めげずに、六原さんに訊ねた。「六原さん。この大家さんとはどういう関係だったの？」

「どういう関係って……。基本は借主と貸主の間柄だったから、会えば挨拶くらいはしたさ」

「それだけ？」
数秒の間があつて、六原さんは答えた。「……長い付き合い

いではあつたな。俺が就職した時、ここに越してきたから」

「あれ、前は無職かフリーターって言ってなかったっけ？」

「それは死ぬ直前の話だ。最初はちゃんと就職しようとしたさ。就職氷河期のど真ん中でまったく仕事は見つからないわ、やつと職場が決まったと思つたらすぐに倒産するわ、散々だったけどよ。でも、あの大家は、俺が困つた時によく飯を食わせてくれた。ああいう性格だろ、俺が断つても問答無用で部屋に上がり込んできて、『若い奴はもつと食え』って言って飯を置いていったんだ。そのおかげで、なんとか生きてこられたって面はあるな」

「そうなんだ。じゃあ、六原さんにとつて大家さんは恩人だね」

「そう……、かもしれねえなあ」

期待が高まつてきた。六原さんは、自分が死んでしまったことに対して、少なからず大家さんに罪悪感を抱いている。それを拭い去ることができれば、きっと未練も晴れるはず。

「じゃあ、六原さん。大家さんに向かって謝罪とお礼を伝えよう」

「はっ？ おいおい、猫が喋って良いのか？」

「良いよ、この際だから」

「……つたく、しようがねえな」

おっ、六原さんもうとうとうその気になってくれたようだ。僕とトラの勝利は近い！

パンフレットと書類を抱えて、大家が戻ってきた。
「どうも、お待たせしました。いかがですか、部屋の方は。」

満足していただけましたか？」

「ええ、まあ」

「それは良かった。あなたのようなお若い方の一人暮らしにはびつたりだと思います。じゃあ、契約ということでよろしいですね」

「あっ、大家さん。ちょっと待ってください」

僕はキャリアバッグを両手で抱え、大家の前に差し出した。

——さあ、六原さん。今こそ未練を晴らすんだ！

しかし、六原さんは黙ったままだった。ここまで来て、恥ずかしがっているのか？

大家は僕の顔とキャリアバッグを交互に見て言った。

「ベットですか？ もちろん大丈夫です」

「あっ、いえ、違います」

六原さんはまだ沈黙を続けている。何をぐずぐずしている。いつもの僕に対する傲岸不遜っぷりはどうした？

かくなる上は、僕が背中を押してやらないと。

「あのう、大家さん。実は僕、前ここに住んでいた人のことについて、話があつて来ました」

契約書を用意していた大家の手が止まった。

「……今、なんて言ったんです？」

「六原さんのことについて、お話が」

「六原……だと」

目を見張った。大家の手がプルプルと震え始めたのだ。

恐る恐る「あのう、大家さん？」と訊ねると、彼は書類を地面に激しく叩きつけた。

「六原！ あの忌々しい奴め。あいつにどれだけ苦労と面倒をかけさせられたことか！ あなた、六原とどういう関係だ？」

白髪鬼と化した大家に睨みつけられ、震え上がった。

「せっかかく色々世話してやったのに、恩を仇で返しやがって。滞納していた家賃もずっと待ってやったのに、結局払わず死にやがるし。部屋の清掃とリフォームにも幾らかかったと思ってるんだ！ おまけに、事故物件になったせいで、他の住人は出ていくし、値段も下げなきゃならないし。あの豚野郎、どれだけ迷惑をかければ気が済むんだ。おかげでこつちが首を吊りたいくらいだ！」

両手をわなわなと震わせ、大家が近づいてくる。

「あんた、六原の知り合いなら、この多大な損失を弁償してくれないか！」

「悠、逃げろ！」

キャリアバッグから聞こえた六原さんの言葉に従い、一目散に建物から逃げ出した。

5

大家があそこまで怒っていたとは、想像もしていなかった。あの憤怒の形相は、しばらく忘れられそうにない。

「これが現実さ」と、六原さんは帰り道に言った。「でもおかげで、俺のなけなしの罪悪感も綺麗に吹き飛んじまった。これで本当に心置きなく異世界に行けるってもんだ」

後味の悪い展開だったが、最後に嬉しい言葉が聞けた。期待を胸に膨らませて家に帰った。

アパートに着くなり、六原さんはノートPCを立ち上げ、ブラウザゲームを始めた。

「ほら、悠。約束だぞ、クレジットカードを貸せ」

「あれ……、おかしいな」

「何がおかしいんだ？」

「経緯はどうあれ、心残りは無くなったんでしょ。なのにどうして成仏しないの？」

「俺が知るか。そんなことより、早くクレジットカードの番号を教えろ。リリコちゃんとの大人のデートが待ってるんだ」

パンパンと肉球で僕の膝を叩いてくる六原さん。

財布から取り出したクレジットカードを六原さんに渡しながから、彼が成仏しない原因について考え始めた。

六原さんは、罪悪感は無くなったと口では言ったが、やはり心のどこかではちゃんと大家に謝りたいと思っているのだろうか？ それとも、まだ別の未練が残っているのかもしれない。それを訊ねても、きつと六原さんは「そんなものはない」と言うだろう。本当の未練が何なのか本人にもわかっていないのでは？

何かヒントはないだろうか？

ふと、六原さんの遺品箱のことが頭に浮かんだ。なんとなく気が咎めて中身は見えていなかったが、トラを取り戻すため、背に腹は変えられない。クローゼットを開けて、遺品箱を取り出した。六原さんの部屋にあった物はほとんどゴミとして

処分されたが、保存状態が良かったものは遺品として残しておいたと、蟹田は言っていた。蓋を開けると、中身はたった一つだけで、それは表彰楯だった。プレートには「平成〇年度 ××県演劇大会高校生の部 優秀演者賞 六原之雄殿」と彫られていた。

六原さんが視線だけをこちらへ向けてきた。「おっ、そんなに残ってたのか」

「なんなの、これ？」

「見りゃわかるだろ」

「いや、そうだけだ。これって、六原さんにとって大事な物なの？」

「そんなんじゃねえよ」

「じゃあ、だったらどうして大切に保管してあったの？」

六原さんはPC画面に視線を戻した。「お前なんかに教えるかよ。秘密だ、秘密。……っておい、悠。課金しようと思ったらパスワード画面が出たぞ。どうなってるんだ？」

「そのクレジットカード、インターネットで使うときはパスワードが必要なんだよ」

「じゃあ、そのパスワードを教えろ」

「やだよ」

「おいおい、なめたこと言ってるんじゃねえぞ。ここまで来て、寸止めなんて耐えられるか」

「だったら……」僕は楯を六原さんの鼻先に突きつけた。

「くそっ、足元見やがって……。見ればわかるだろ。俺が高校の時に取った演劇の賞だ」

「六原さんって、演劇部だったの？」

「まあな。当時はそこそこ評判が良かったんだ。俺の演技は」

「へえ」

なるほど、時々芝居がかったような口調で喋るのは、その名残なのかもしれない。

「それだけの話だ。な、教えてやっただろ。だからそっちもパスワードを教えろ」

「じゃあ、プロになるってことは考えなかったの？」

「なんだよ、さっきから。そんなに俺のプライベートが知りたいのか？ 気色悪い」

「給料も出たことだし、たまには奮発して牛肉でも買おうかな」

「ったく、しようがねえな」六原さんは後ろ足で顎裏をポリポリと掻いた。「俺の話なんて聞いたところで、短編小説一本書けやしねえぞ」

チョロいなあ。六原さんを操る術がわかってきたような気がした。

「プロか……。まあそんな夢を持たなかったって言えば嘘になるな。大学時代も演劇サークルに入ってたし。素人劇団で何回か出演したこともある」

「凄い」

人前で一言挨拶することすら苦手な僕にとっては、役を演じること自体賞賛の対象だった。

「まっ、まあな」六原さんは自慢げに、鼻をツンと上へ向けた。

「でもどうして、プロにならなかったの？」

「お前なあ。プロってそう甘いもんじゃねえぞ。俺も大学時代それなりに訓練したけど、上には上がいるってはっきり思い知らされたからな。だから就職活動の時期になって、可能性の低い夢を諦めずプロを目指すか、人並みの安定を手に入れるかって考えりゃ、よほど自分に自信があるか、よほどのバカじゃない限り、後者を選ぶだろ」

「まあ……。そうだね」

僕にはそういうことすら選ぶ自由もなかった。両親が亡くなって、一刻も早く自立しなければならぬ、それだけを考えていた。

「だから、その楯は俺にとっちゃ過去の思い出の一つでしかねえのさ。これで俺の話は本当に終わりだ。俺にとっちゃそんな過去の夢より、今リリコちゃんと大人のデートをする方が重要なんだ。さっ、パスワード、パスワード」

六原さんはそう言うが、本当なのだろうか？ だったらどうして、この楯だけが大切に保管されていたのだろうか？ や

っぱり演劇は彼にとって捨てがたいものじゃないだろうか？ もし、六原さんの秘めた未練が、プロの役者になれなかったというのであれば、それを晴らすのはとても難しくそうだ。

「ほら、ぼつとしてねえで、早くパスワードを教えろ」

六原さんが両前足で僕の膝を揺すってきた。しようがないなあと思いつつ、ノートPCへ向かう。

「へっへっへっ、リリコちゃん待っててね。もうすぐデート

しま……」

その時、僕のスマホからメッセージ受信を知らせるチャイムが鳴った。キーボードへ伸ばしていた両手を引つ込めて、テーブル上のスマホを手繰り寄せた。

「おいおい、メールなんていつでも読めるだろ。それよりも早く課金させてくれ」

「会社からだったらどうするの……。あつ、鷺見さんからだ」

「鷺見？ 誰だ、それは」

「NPOの人。トラはそこから引き取ったんだよ」

「ああ、保護猫がどうたらこうたらつてやつか。猫の面倒見るより先に人間様の面倒を見てくれよな」

チャットアプリを開いて、鷺見さんからのメッセージを確認する。内容は猫友会が来週の日曜日に開催されるから、参加するなら金曜日までに連絡が欲しい、という業務連絡みたいなものだった。

——ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ、別のメッセージを期待してただけ、ほんのちよつとだけ、別のメッセージ

「どうした？」六原さんが僕の肘を乗り越えて、スマホを覗き込んできた。「この送り主の鷺見って奴は男か？」

「女性だけだ」

「ほう」六原さんの目が大きく広がった。「年はいくつくらいだ？」

「僕と同じか、少し上だと思うけど」

「なるほどなるほど。そいつは結婚、あるいは付き合っている奴がいるのか？」

「知らないよ。独身だとは思うけど。どうしたの、突然」

六原さんの目は、闇夜に現れた山猫のように爛々と輝いていた。

「いや。悠ばつかり俺の話を根掘り葉掘り聞いてくるから、不公平だなんて思えてきて。そうしたら、都合よく女の方からメールが来たんだ。気になるだろうよ」

「メールじゃなくて、チャットなんだけど」

「どつちでもいいんだよ、そんなことは。で、どうなんだよ。彼女、可愛いのか？」

六原さんが執拗に迫ってくる。うつとおしい。「可愛いって言うより、芯のしつかりしてそうな、強い女性ってイメージかな」

「おおつ、淀みなく彼女を評せるってことは、さては相当気になってるな。えつ、どうなんだよ」

「えつと……」六原さんの鋭い指摘に、言葉が返せなかった。「無言こそ雄弁なる答えだな。なんだよ、女の気配がまったくねえ奴だなと思つたのに、意外だな、おい」六原さんの

前足が僕の股をポンポンと叩いてきた。「じゃあ、この猫友会つてやつに行くんだな」

「それは、ちよつと……」

「せっかくの彼女からの誘いだぞ。俺だったら喜んで行くぞ」

「彼女の誘いつて言うよりは、NPOの会合だから」

僕は猫友会がNPOから猫を譲り受けた人たちの交流の場で、鷺見さんと二人きりで会うものではないということを六原さんに伝えた。

「なんだ、そういうことか」六原さんは興味を失ったかのように、僕から距離をとった。「でもせっかくの誘いだろ。参加した方が彼女の好感度も上がるだろうぜ」

「こういう、人が集まる場って苦手なんだよ」

本当は僕だって、鷺見さんと会える回数を増やせたら、と思う。しかし、不特定多数の人から注目されると、誰も取って食べたりはしないとわかっている、体が反射的に拒否反応を示してしまうのだからしょうがない。

六原さんはもう一度「ものは試しに行ってみろよ」と参加を勧めてきたが、僕が頑なに拒否したため、「つまらん奴だな」と言い残して、ノートPCへ戻ってしまった。

わかっている。僕はつまらない人間だ。つまらない人間はつまらない人間らしく、息を殺すように、静かに生きていくしかない。

「じゃあ、僕は夕食の買い出しに行ってくるから」

そう言い残して、家を出た。

クレジットカードのパスワード入力のこと、すっかり忘れていた。

6

やっと起きたか。今日はいつもより遅いな。月曜日だろ。もしかして、会社が休みなのか？

——違う、ただの寝坊？

ふーん、いつも目覚ましが鳴る前に起きるお前も、寝坊す

ることがあるんだな。まあいいや、早く、俺の朝飯を作ってくれ。ネットのニュースサイトにコメント書いてたら、朝になつてよ、腹が減つてしようがないんだ。

——えっ、そんな時間はない！

おいおい、じゃあ俺は何食べばいいんだ。お前の可愛いこの猫を飢え死にさせてもいいのかよ！……キャットフード？　だから、なんで俺が猫の飯を食わなきゃならねえんだ、断固断る。他にねえのかよ。……食パンだけ？　ったく、しようがねえな。今日だけだぞ。その代わり夕食はもつとマシな物食わせろよ。……んっ、どうした？　そんなところで突っ立って。ほらほら、急げよ。ぼーっとしてる暇なんかねえんだろ。

……行つたか。慌ただしい奴だな。朝くらいゆっくりすればいいものを。会社も仕事も逃げやしねえのに。あいつ、ワーカーホリックなのかねえ。俺には理解できねえや。雀の涙の賃金を貰うがために無能な上司にこき使われて、何が楽しいんだか。まっ、あいつがどう思おうと、俺には関係ないかこうして、朝と晩の食事が出て、暇つぶしに困らなければ、文句はねえし。やっぱり飼ひ猫って、最高の御身分だな！

それじゃあ、俺は優雅に朝食といきますか。とは言え、一斤百円の安物。それにバターもジャムもないときた。実に味気ない。これならキャットフードの方がまだマシに思えてくるな。

……よし、ものは試した。キャットフードを少し食ってみるか。どれどれ匂いは……、なんとも形容し難いな。魚……

いやシーチキンに近いか。じゃあまずは一粒……硬っ！煎餅よりも硬くないか。普通の猫って毎日これ食ってるのか、凄えな。……やっと噛み砕けた。もうこれだけで一日の仕事をやり終えたって気になってくるな。……モグモグ。……なるほど、極限にまで乾燥させたビーフジャーキーって考えれば、つまみとしては有りかもしれねえな。とにかく、口は乾くけど。

少し食い足りねえ気もするけど、今日はこれで勘弁してやるか。それじゃあ、俺はそろそろ寝るとするか。悠も出ていったことだし、あいつのベッドを拝借、……どつこらしよつと。やっぱり布団はいいねえ。静かだし、ぐっすり眠れそうだ。

……それにしても悠の奴、本当に大丈夫かいな？ 突然ぼーっと立ち止まるし、足取りも少し怪しかったけど。体調悪いんじゃないか。でもまあ、自業自得だろ。日曜日はしっかり休んで体力を回復させるなんて言ってたくせに、突然、俺の未練を晴らして成仏させるとかなんとか言い出すんだからそれで失敗してりや世話がないさ。あの時、俺は必要ねえって、ちゃんと止めたぞ。

でも、俺の未練って何だ？ 漫画の続きが知りたいとか、一度くらい海外旅行へ行ってみたかったとか、赤坂の高級中華料理屋で満漢全席食ってみたかったとか、細かい願望なら山ほどあるさ。けど、それってこの世に留まっても晴らしたい未練なのか？

でもまあ、俺にとつちやどうでもいい話だ。未練があるう

がなかるうが、今の状況じゃあどうしようもできねえし。一刻も早く、俺を追い出したい悠には悪いけど、もうしばらく悠々自適のキャットライフを満喫させてもらおうとするか。

「……部、雀部！」

名前を呼ぶ声に気づいて、慌てて顔を上げた。声の主は隣の席にいた猪口先輩だった。

「何をやってるんだ。課長が呼んでるぞ」

「えっ」

急いで課長席へ向かう。頭の中でしきりに銅鑼が鳴っているような音が響いていて、それ以外の周囲の音がほとんど耳に入っていない。

鷹野課長は腕を組んで僕のことを睨み上げてきた。「雀部、最近たるんでないか。全然俺の声を聞いてないだろ。それだから、客からは怒られるし、協力会社からは舐められるんだ。シャキッとしろ、シャキッと」

既視感を覚えつつも、「すみません」と言っ、頭を下げた。

ちっと舌打ちを一つ入れてから、課長は続けた。「前に渡した案件の状況、どうなってる」

「あつ、はい。協力会社と一緒に仕様を確認しながら、見積書を作成中です」

「いつ頃できそうだ？」

「今週末になります」

「営業部からの要求だ。明日までに作れ」

「えっと……」再び頭の中で銅鑼が激しく鳴り始めた。「三日早めるということですか。それはちよつと無理かと」

「無理を可能にするのが俺たちの仕事だろうが」鷹野課長は眉間に皺を寄せた。「下請けどもに鞭打つてでもやらせろ」

「それはさすがに無茶かと……」

「見積が遅れて案件自体が無くなったら、全員、飯が食えなくなるんだぞ。ならやるしかない。子どもでもわかる道理だ」頭を抱えて、自席に戻った。すぐに猪口先輩が声をかけてきた。

「課長の鬼畜っぷりは相変わらずだな。俺たちや協力会社の人間のことなんて道具としか思っていないんだ」

「はい……、頭が痛くなりました」

「わかるよ……つて、雀部。いつもより顔が青くないか？」

「それは、周りからいつも言われてますけど」

「それはそうだけどき。普段より酷いって言うか、まるでゾンビ映画から抜け出してきたみたいだ。今日は早めに帰って休んだ方が良いんじゃないのか」

「頭も痛いですし、そうしたいのは山々なんですけど、早いところ見積を作る必要があります」

「そりゃ、災難だな」

昼食休憩を知らせるチャイムが鳴った。

「おっと、もうそんな時間か。じゃあ、元気が出るような物でも食いに行くか？ 鰻とか」

「遠慮しておきます。食欲があまりなくて」

「そうか、無理するなよ」

先輩を見送った後、机の上に突っ伏して、目を閉じた。

大きな手で鷲掴みされたかのように頭がジンジンと痛い。それに少し寒気も感じる。

きつと、寝不足からくる体調不良だろう。昼寝をすれば少しは調子も戻るに違いない。

全ての元凶は、六原さんとそれを招いた骨壺だ。

一刻も早く六原さんをトラから追い出さないと、僕の生活も体も壊れてしまう。

でもどうすればいいのだろうか？ 昨日の六原さんの未練を晴らす作戦は失敗した。他にも候補がありそうだけど、それの一つ一つ片付けていくのはさすがに無理がある。もしこのままずっと六原さんと一緒に暮らさないといけない、なんて考えたら、心底ゾツとした。

でも今だけは、あれこれ考えるのは止めよう。少しでも寝て体力を回復させないと……。

その時、窓の外から大音声が聞こえてきた。

『ご通行の皆さん。どうかしばし足を止めて私どもの話を聞いてください！ 今未曾有の危機にあるこの国の政治を変えないといけないのです！』

近くで政治家が街頭演説を始めたらしい。

結局その大音声のせいでも、一睡もできなかった。

7

翌日の朝、頭痛は治るところか更に酷くなっていた。体の

節々も少し痛い。それでも何とかベッドから起き上がった、洗面所へ向かおうとした。

ところが、足に力が思うように入らず、その場でよろけてしまった。

「フギャー！」六原さんの悲鳴がした。「おい、悠！俺の尻尾を踏むんじゃないか。ここ結構痛いんだからな」

「ご、ごめん」

六原さんに謝り、今度こそ洗面所へ向かって歩き始めた。すると背後から再び六原さんの声がした。

「そっちは洗面所じゃねえぞ」

「えっ？」

気づいた時には後の祭り。僕はクローゼットの角に頭をぶつけていた。

「痛っ……」

「さつきから、何寝ぼけてるんだ？」

「しよがないでしょ、寝不足なんだから。今日も三、四時間しか寝れていないし」

見積書を作成しようと、昨日も頭痛に耐えながら終電間際まで会社にいたため、寝る時間がほとんど取れていなかった。

六原さんは大きな欠伸をした。「ちゃんと寝ないとダメだろ。睡眠不足は体に悪い」

「だっ、誰のせいだと……」

六原さんが朝方まで映画を観ていなければ、五時間は睡眠を確保できていたはずだ。

しかし、僕の憤りなど微塵も理解した様子はなく、六原さ

んは空いたベッドの上に飛び乗り、丸くなってしまった。

——一刻も早く、追い出してやりたい！

しかし今は、会社へ行くことの方が重要だ。今度こそ洗面所へ向かおうと歩き出した。すると、また目眩がして、蹲ってしまった。

「おいおい」六原さんが上半身を起こして僕を見た。「寝不足って言うより、風邪でもひいたんじゃないか？柳の下に立つ幽霊みたいに顔が青いぞ」

言われてみれば、少し頬や首の周りが火照っているようにも感じられた。

「……大丈夫だよ、これくらい」

「いやいや」六原さんはベッドを降りて僕の方へ近づいてきた。「意識朦朧で足もフラフラ。朝でそれなら、昼になつたら立っていられなくなるぞ。さすがに、今日は会社休んだ方が良いんじゃないのか？」

「休むなんて、簡単に言わないで。今日中に片付けられないじゃない仕事が溜まっているんだから」

僕が休んだら、同僚や協力会社に迷惑をかけることになるし、鷹野課長や営業部の連中からもありつたけの叱責と嫌味を聞かされることになる。とてもじゃないが風邪くらいで休んでいられない。

「とはいえ、そんな状況で会社に行っても、まともに仕事なんてできねえだろ」

「大丈夫、風邪薬を飲むから。余計な心配なんて要らない」「余計な心配って……、俺はただ……」六原さんは数秒ほど

無言で僕を見上げていたが、「お前の体だ。悠が大丈夫って言うなら、俺は止めないよ」と言って、ベッドの上に戻ってしまった。

なんだよ、引っかかる言い方だな……。体調不良の原因は六原さんなのに。

彼と問答している間に、家を出る時間になってしまった。急いで洗面所で顔を洗い、出勤用のスーツに着替えた。それから食パンを半切れだけ食べて、ストックしてある鎮痛剤を飲んだ。財布とスマホとバッグを手にして、玄関へ向かう。

「……あつ、そうだ」

扉を開ける寸前、六原さんから今日の夕食の希望を聞いていないことを思い出した。いつもだったら、向こうから、刺身が良いだの焼肉が良いだの、独り暮らしには少々ハードルの高い注文を出してくる。僕が勝手に決めてしまっても良いのだけど、希望をまったく聞かないのもあんまりだ。

「六原さん、今日の夕食は何にすれば良いの？」

しかし、返事はなかった。寝てしまったのだろうか。

「六原さん、聞いている？」

まだ答えはない。

「だったら、僕が勝手に選ぶよ」

すると居間から、六原さんが駆け寄ってきた。

「あーイライラする。お前はとうしようもないバカだな！

俺の食事のことより、少しは自分の体のことを心配しろ」

彼の態度に困惑させられた。六原さんは普段から口が悪くてしょっちゅう怒鳴るけど、これまでにないほど怒っている

様子だったからだ。

「ちよつとこつち来い」六原さんが顎をしゃくった。

「でも、早く行かないと会社に間に合わない」

「いいから！」

六原さんの有無を言わせぬ雰囲気、条件反射的に従ってしまった。六原さんの後に続いて居間へ戻り、ベッドに腰を下ろした。

「まずは、体温計で熱を測れ」

「はい」ベッド側に置いてあるペン立てに刺さっていた電子体温計を取り出し、脇の下に入れた。体温計の数値が瞬く間に上昇していくのが見えた。

数分後、計測終了の合図を知らせるブザー音が鳴った。

「よし、見せてみろ」

体温計の表示部を六原さんに見せると、彼は目を丸くした。「三十八度！ お前、よくこれで会社に行こうなんて思えるな」

「そんなこと言ったって、仕事は待ってくれないし」

「生真面目さも度が過ぎるとただのバカだな。それじゃあ、次にスマホを出せ」

「どうして？」

断ろうとしたが、六原さんが今にも爪を立てて引っ掻いてきそうな雰囲気だったので、渋々スマホを渡した。

「って、六原さん。そんな手でスマホのタッチパネルを操作できるの？」

「パソコンのキーボードだって使えるようになったんだ。人

間為せば成るものさ」

そう言って六原さんは、前足をペロリと一舐めすると、スマホを操作し始め、電話アプリを立ち上げた。

「おっ」

素直に驚いた。スマホを器用に操る猫。このシーンを動画に撮って、ネットにアップすればバズること間違いなしだが、肝心の撮影機器は猫が持っている。

「って、六原さん。何するつもり？」

連絡帳の画面をスクロールさせながら、六原さんは答えた。「そりゃもちろん、お前の会社に電話するんだ。今日は休みますって」

「それは止めて！」

六原さんからスマホを取り返そうとしたが、また目眩が襲ってきた。

「だから、そんな体じゃ会社に行っても仕事にならねえって。俺が上手いこと話しておいてやるから、今日は寝てろ」

視界が揺れる中、六原さんがテーブルに置いたスマホに向かって話しかける姿が見えた。

「あー、おはようございます。俺です。雀部悠です。実は今日体調が悪くて……。声が変わる？ ええ、ちょっと喉もやられまして。ごほっごほっ。……。本当に申し訳ありませんが、よろしく願います」

通話を切った六原さんが顔を上げた。「ほら、ちゃんと休むって伝えておいてやったぞ」

「あーっ、どうしよう」

急に体から力が抜けて、僕はベッドの上で横になった。

「喜べよ、休めるんだから」

六原さんはベッドに飛び乗って、僕の顔の横で両前足を揃えて座った。

「休んだ後が問題なんだ。課長や周りから非難の目を向けられるんだ。いたたまれないよ」

「厳しい会社だな。まあ俺も、一時期そういうようなところで働いてたことあるけど」六原さんは後ろ足で耳裏を掻きながら言った。「案ずるよりも産むが易し。案外誰も気にしてねえって。むしろ、休んだことすら周りは気づいてないから」

「六原さんが居たところはね。鷹野課長や営業部の恐ろしさを知らないから、そういう呑気なことが言えるんだ。他にも今日中に終えないといけない仕事があるし。やつぱり、会社に行かないと」

体を起こそうとすると、六原さんは鋭い牙をむき出しにして「フーツ！」と威嚇するような声を出してきた。

「何度も言わせるな！ 今日寝てろ。もし、外に出ようとしたら、二度と街中を歩けなくなるくらいその顔を引っ掻いてやるからな」

六原さんはベッドの敷布団でバリバリと爪を研ぎ始めた。この人なら本気でやりかねない。少なくとも今は従うより他になかった。

夜通し起きていた六原さんはじきに睡魔に勝てなくなるだろう。彼が眠ってから会社へ行くことにした。多少遅刻してしまうことになるが、一日休むよりはましだ。

目を閉じる。

次の瞬間、深い眠りへ引き込まれていった。

やれやれ、やっと寝たか。世話かけさせやがって。

やっぱり……、これって俺のせいなのか？ 俺がこの猫の体に宿って居候を始めた、その気疲れが原因なんじゃあ……でも、俺だって好きで猫に宿ってるわけじゃねえんだからな。早く成仏して異世界に転生して、エルフの姉ちゃんたちと毎日イチャイチャしながら暮らしたいんだ。……まあ、今の身分もいたせり尽せりで、悪くはねえがよ。

でもそれが問題なのかもな。立場に甘んじて、悠にはわがままを言い過ぎたかもしれねえ。飯はもう少し質素でも我慢してやってもいいかな。それに夜更かしも自重するか。ソシヤゲの課金は……もう少し増やして欲しいな。

でも、責任逃れをしたいわけじゃねえけど、悠の話を聞いてると、原因は俺だけじゃねえぞ、絶対。

熱や目眩に襲われても、脅迫的なまでに会社にこだわる理由はなんだろうな？ 自分がいなきや世界が終わるなんて思ってるんじゃねえのか？ 気持ち悪いほどの真面目……いや、バカだな。自分の代わりなんていくらでもいるっていうの。どれだけ忠誠を尽くして、身を粉にして働いても、向こうの都合が悪くなったら、ボロ雑巾のように捨てられるだけだったっていうのによ。俺みたいに……。

俺だって、悠くらしいの歳の頃は無我夢中に働いたさ。プロの演者になれなかつた分、それ以外の仕事でちゃんと結果を

残したいと思ってた。たとえ正社員になれず、派遣や契約社員だとしても、会社や社会に貢献したいって思ってたんだよな。でも、ある日突然、前触れもなく契約を切られて、別の会社に行ったら、また契約を切られて……その繰り返し。契約解除の理由はだいたいいつも同じだ。「君はとてよく働いてくれているんだけどね、経済状況が……」「職場としてはこれからも続けて欲しいと思ってるんだよ。でも会社の方針として……」俺自身の能力が理由ならまだ反省や対処のしようもある。でもそれ以外を理由にされたら、もうどうしようもないだろ。ちっとも前へ進めない俺自身も憎かったし、前へ進むのを阻もうとする社会や環境が憎かった。

でもよ、俺たちが街の片隅で熱にうなされようと、血を吐こうと、自分自身や他人を憎もうと、そもそも俺たちが居ようが居まいが、世界は何事もなく回っていくんだよな、悔しいけど。

だからもつと、気楽に生きりゃいいんだ。何もかも忘れて。何もかも諦めて。

お前は俺に、未練はないのかって訊くけど、むしろ俺は悠に訊いてやりたいね。お前は一体何に拘ってるのかって。

って、こんな事、寝てる奴に話しても無駄か。説教垂れるのは俺の趣味じゃねえし。

さてと、俺も本当に瞼が重くなってきたから、寝るとするか。

目を覚ますと、部屋を照らしていた日差しはまだ朝日だった。六原さんも眠っているようだし、そろそろ会社に行くか、と思い、体を起こすと、無性にお腹が空いていることに気づいた。朝食は食べたばかりのはず……。

「まさか!」

スマホで時間を確認する。なんと、ほぼ丸一日寝てしまっていた。

しかしそのおかげか、頭痛も目眩も治っていて、霜取り直後の冷凍庫のように頭はクリアに冴え渡っていた。過去数年で類を見ない調子の良さだ。

同時に、全身は恐怖で震え始めていた。結局、昨日が締切の見積書を作ることができなかった。全能神の怒りの如き雷が鷹野課長から降り注がれるに違いない。

部屋の隅で「スースー」と寝息を立てている六原さんを睨んだ。むりやり僕を休ませた件について、文句の一つも言わずにやりたかったが、今起こしても時間の浪費になりかねない。手早く出勤の準備を済ませ、六原さんには朝食用に食パンと茹でたソーセージを用意して、アパートを出た。

会社に着き、敵地に潜入したスパイのように、足音立てず事務所を進む。既に出動していた同僚たちはPCモニターへ目を向けて黙々と業務を進めていた。自席に座ると、猪口先輩の声が聞こえた。

「雀部、おはよう」

「おつ、おはようございます」激しく脈動する心臓の音を感じつつ、僕は頭を下げた。「き、昨日は申し訳ありませんでした」

「昨日……?」猪口先輩はわずかに首を傾げた後、「ああ」と言って、手を叩いた。「そういえば体調不良で休んでたなお前。体はもう大丈夫なのか?」

「はい、おかげさまで」

猪口先輩は昨日休んだことについて文句も嫌味も言っていない。なかった。

「それで先輩、一つご相談があります……」

「どうした、改まって?」借金の保証人になって欲しいのか?」

「そんなことお願いしませんよ……」

「じゃあ、キャバクラにでも連れて行って欲しいのか?」

「……僕、真面目に相談したいんですけど」

「悪い悪い」猪口先輩はゲラゲラと笑った。「お前の眉間にいっぱい皺が寄ってたから。逆にかいかいたくなっただけだ。それで、相談するのは?」

「実は鷹野課長から、昨日までに見積を作るように言われてたんです。でも僕休んでしまっただけ。どうしたらいいでしょうか?」

「深刻な顔して何かと思えば、そんなことか。それって、顧客が昨日欲しいって言ったのか?」

「いいえ。課長と営業部で精査したいからって」

「じゃあ、大丈夫だ。課長も営業部の連中も小心者だからな。」

締切を早く設定してただけだ。病気の体に鞭打ってまで守らなきゃならないもんじゃない」

「そうだったんですか」

「今日、鷹野さん終日外出してるから、何食わぬ顔で見積書を提出しておけば問題ないさ。雀部もそろそろ課長の行動原理を理解しておけ。会社員の大切な処世術だ」

「はい。ありがとうございます」

猪口先輩に礼を言っ、自身のPCへ向かった。体が軽くなったような気がした。猪口先輩に相談して本当に良かった。一日休んだせいで溜まりに溜まったメールを順にチェックしていく。協力会社からの見積書も届いていた。内容を確認して、僕の担当部分の見積を追加して、一式を鷹野課長へメールで送信した。

数時間後、課長から返信がきた。中身は一言、〈受け取りました〉とだけあった。怒っている様子はない。「はーっ」と安堵の息が漏れた。

9

アパートの玄関扉を開けると、部屋の中は暗く物音も聞こえなかった。

奇妙だった。時計は夜の十時を回っている。六原さんはこれから本格的な活動時間で、いつもなら室内に煌々と明かりが灯り、映画やゲームの音楽がガンガン流れているはずだった。

「六原さん？」

居間に向かって声をかけるも返事はない。明かりを点けつ奥へ進むと、猫用寝布団の上で六原さんが丸くなっていた。

これは異常だ。もしかして僕の風邪がうつって、六原さんまで具合を悪くしてしまったのでは？ 人間の風邪って猫にうつるの？ と一瞬思ったが、不安は拡大していく。

「六原さん、大丈夫？」

僕は彼の背中をさすった。すると、片方の耳がピクリと動いた。

「あつ、うん……」六原さんが目を開けて首を僕の方へ回してきた。「なんだ、悠か？ どうした？」

「どうしたって訊きたいのはこっちだよ。体調悪いの？」

「いや、俺はピンピンしてるぜ」

「じゃあ、どうして寝てたの？」

「そりやお前、九時を過ぎたら、良い子は寝る時間だろ」

「はっ？」

六原さんは両前足で床を掴み、お尻をぐっと持ち上げて大きく伸びをした。

「日の出とともに起き、日の入りとともに寝る。これぞ太古の昔より脈々と続いてきた人間本来のべき姿ってやつよ。現代社会は夜が明るすぎるんだ。俺たちはもっと野生へ立ち戻るべきだと思っただけさ」

「ごめん、何言ってるかさっぱりわからないんだけど」

風邪が再発したかと思うような目眩を感じた。六原さん、何か悪いものでも食べてしまったんじゃない。

ペロペロと舌で毛づくろいをしながら六原さんは言った。
「まっ、要するにだ。俺ももう少し規則正しい生活を心がけようと思ったんだ」

「つまり、明け方までテレビとかゲームをしないってこと？」
「なるべく控える」六原さんは頷いた。「それに、飯も猫にとって栄養になるものを食うように心がけるつもりだ。これは俺だけの体じゃねえしな。……ってどうした、悠？ 幽霊でも見たような目をして」

最初、トラの体の中に六原さん以外の別の地縛霊が更に取り付いたんじゃないかと思った。そうでなければ、彼の豹変を説明することなどとてもできない。しかし、内容はともかく口調は六原さんそのものだ。

「信じられない……。やっぱり体調を壊したんじゃ」

「だから俺はピンピンしてるって、言ってるだろ。俺が早く寝るのがそんなに不満か？」

「いや、そうじゃないけど」首を振って強く否定した。「でもどうい風風の吹きまわし？」

「そっ、そりやお前……」六原さんは僕から顔を逸らした。

「そ、そんなことより悠。手に持つてるそのビニル袋がずつと気になってんだ。そこからいい匂いがする」

僕としては夜にちゃんと眠れることができるなら、どんな理由であれ大歓迎だ。だから、これ以上の詮索はしないことにした。

ビニル袋をローテーブルに置いて、中身を取り出した。その瞬間、六原さんの目が輝きだした。

「おい、それ。寿司じゃないか。しかも河童巻きでも納豆巻きでもねえ、立派な握り寿司だ！」

「スーパーの特売で買ったパック寿司だけだね」

「それでも、他の惣菜に比べりゃ高いだろ。どうしたんだよこれ。何か良いことあったのか？」

六原さんの詮索するような視線から、顔を逸らした。「まっ、まあね」

休んだことに対して、誰からも文句や嫌味を言われることはなかったし、見積も無事完成して鷹野課長へ提出できた。

結果的には昨日休んで正解だった。もし無理をしていたら、会社で倒れて逆に大勢の人たちに迷惑をかけていたかもしれない。だから、強引にでも僕を止めてくれた六原さんに感謝すべきでは、と思ったのだ。この寿司は彼への気持ちだ。

「よっしゃ、早速食おうぜ。醤油はどこだ？」

六原さんは爪を使って器用に上蓋を外した。

「おっ！ 雲丹が入ってるじゃねえか。こっちはもしかして中トロか？ ずいぶん高いもん買ってきたな。この二つは俺がもらった」

「取り分けるよ」

上蓋を皿代わりにして、雲丹と中トロを六原さんの前に差し出した。

「サンキュー。じゃあ早速……。うーん、旨い」六原さんの毛並みが静電気でも帯びたかのように一斉に逆立った。「おっ、ワサビがツーンときた。ツーンと。でもこれが良い！」

猫はワサビを食べても大丈夫なのだろうか？ と思ったが、

まあ今日くらいは大目に見よう。

「ほら悠。お前も食えよ。あつという間に無くなっちまうぜ」と言った六原さんは、雲丹と中トロをペロリと平らげると、残りの寿司を見下ろし、首を左右に動かして次なる獲物を吟味し始めた。

僕はサバをつまみ上げた。

「光り物とは、渋いなお前。本当にまだ二十代か？ ……じやあ俺はこれだ」

六原さんはサーモンを指し示したので、上蓋に取り分けてあげた。

「脂がしっかりとって、舌の上に置いただけでとろけそうだが、本当にスーパの特売品か。超旨いぞ、これ」

「僕も初めて買ったけど、確かに美味しい」

続いて甘エビを掴んだ。すると、六原さんが「あーっ！」と大声で叫んだ。

「それ、俺が次に狙ってたやつ。おい寄越せ」

「嫌だよ」六原さんの猫パンチが届く前に、甘エビを口の中に放り込んだ。

「マジかよ。食っちゃまいやがったぞ。血も涙もない鬼だな、お前は。じゃあ俺はこれだ」

そう言うやいなや、六原さんはカンパチを直接かぶりついた。

「ちよつと、猫の毛が他のネタについてちゃうでしょ。やめて」「うるせえ。こうなったら残りは全部俺のものだ！」

結局、ガリも含めて残りを全て食べ尽くしてしまった六原

さんは、満足そうに長い舌で唇を舐めまわした。

「食った食った。余は満足じゃ」

「あーあ、本当に全部食べちゃったよ。この人……」

まあ、もともと六原さんのために買ってきたものだから構わないのだけだ。

「久しぶりに寿司を食ったけど、やっぱり旨いな。これぞ日本が世界に誇るべき食文化、ソウルフードだな」

「また、大げさな」

「そんなことない。寿司って凄いな。一人カウンターに座つて、職人の芸術的な腕前を愛でつつ、じっくりと味わうのもありだし、ホームパーティーみたいにみんなでワイワイいながら食うことだってできるんだ。冠婚葬祭どんなシチュエーションにも合う。しかも存在するだけでその場の高級感が一気に増す。こんな万能料理、俺は他に知らないぞ」

「なるほど、みんな、とね……」

僕自身も寿司を食べるのは久しぶりだ。そして何より、人と一緒に食べるのが本当に久しぶりだということに気づいた。両親が亡くなって引き取られた先の親戚は、個々人で食事の時間が違っていたし、大学に入って独り暮らしを始めてからは、ずっと独りで料理して独りで食べていた。会社に勤めるようになってからは、猪口先輩をはじめとして会社の人たちと食事をする機会もある。でもそれは先輩後輩の関係で、食事を共にするというより、会社の会議の延長みたいに感じられる。今、六原さんと居るように、一緒に何かをつまみながら、寿司の魅力などという、今後の人生であまり役に立ちそ

うにない、限りなくどうでもいい話をするなんて事、ずっとなかった。

「んっ、どうした悠？」六原さんが声をかけてきた。「なんか面白いことでもあったのか？」

「えっ、どうして？」

「いや、チェシヤ猫みたいにニヤニヤ笑ってたからさ」

「そう？」

口元を手で隠した。そんなに表情に出ていただろうか？

「なるほど、よほど俺の話が面白かったと見える。さすが俺」と、六原さんは得意げに言った。

「いや、それはない」明確に否定した。

「じゃあ、なんなんだよ。気になるな」

「ヒゲに米粒がついてるよ」

「うおっ、マジか」

六原さんは大慌てでヒゲを引っ掻き始めた。その動きがまた滑稽に見えて、今度こそブツと吹き出してしまった。

「やめろ、笑うな！頼むから米粒を取ってくれ」

六原さんの懇願を受け入れ、ヒゲから米粒を引き離した。

楽しかった。こうして六原さんの話を聞いて、その仕事を
見ているのが。本当は、わがままで自分勝手の六原さんから、

一刻も早くトラの体を取り戻し、平穏な日常を取り戻したい

はずなのに……。

こんな時間も悪くないかな、とも思えてしまった。

「あ、六原さん……」

ところが、言葉の途中で六原さんが喋り出した。

「おい、悠。ズーっと思ってたんだけど。その六原さんってのは、いい加減、やめてくれないか」

「えっ、でも……。あなたは六原さんでしょ」

「いや、まあそうなんだけど。他人行儀すぎるっていうか。

俺のことを六原さんって呼んでたのは、俺が会社に勤めてた時の上司や同僚ぐらいたったからよ。思い出すんだ、その時の嫌な記憶を……」

「そ、そうだったの。ごめんさい」呼び方が他人に与える心情なんて考えたこともなくて、素直に謝った。

「まあ別に、知らなかったんだから構わねえんだけど。一応俺たちって親戚らしいじゃん。生きてた時に会ったことないけど。だからもう少し、親しみを込めて呼んでくれないんだぞ」

「親しみ……。之雄おじさんとか？」

「そうそう、そんな感じ。之雄お兄さんだったらなお良し」

「お兄さん……。ねえ」

これまでずっと六原さんと呼んできたのだ。今更之雄おじさんとかお兄さんとか呼んでくれと言われても、どちらもしっくりこなかった。やっぱり六原さんでいいんじゃない、と答えようとした時、ふと脳裏に一つの単語が浮かんだ。

僕は、両前足を揃えて期待するような眼差しでこちらを見

上げる六原さんに向かって言った。

「じゃあ……。猫おじさん」